尋常小學國史 上卷

文部省

353
179
K 302
3
1
4
D16

尋常小學國史

上卷

文部省

目録

御歴代表

第一　天照大神……一
第二　神武天皇……六
第三　日本武尊……二
第四　神功皇后……一七
第五　仁德天皇……二二
第六　聖德太子……二四
第七　天智天皇と藤原鎌足……二八
第八　天智天皇と藤原鎌足（つゞき）……三三
第九　聖武天皇……三八
第十　和氣清麻呂……四二
第十一　桓武天皇……四五
第十二　最澄と空海……五一
第十三　菅原道眞……五六
第十四　藤原氏の專横……六一
第十五　後三條天皇……六五
第十六　源義家……七〇
第十七　平氏の勃興……八〇

第十八　平重盛……一八八
第十九　武家政治の起……一九四
第二十　後鳥羽上皇……二〇七
第二十一　北條時宗……二一三
第二十二　後醍醐天皇……二三〇
第二十三　楠木正成……二三〇
第二十四　新田義貞……二三七
第二十五　北畠親房と楠木正行……二四二
第二十六　菊池武光……二五〇
第二十七　足利氏の僭上……二五四
第二十八　足利氏の衰微……二五九
第二十九　北條氏康……二六五
第三十　上杉謙信と武田信玄……二七〇
第三十一　毛利元就……二七五
第三十二　後奈良天皇……二八一
年表

御歴代表

御代數	天皇	御在位年間	御代數	天皇	御在位年間	御代數	天皇	御在位年間
一	神武天皇	元—七六	一〇	崇神天皇	五六四—六三二	一九	允恭天皇	一〇七二—一二三
二	綏靖天皇	八〇—一二三	一一	垂仁天皇	六三三—七三〇	二〇	安康天皇	一二三—一二六
三	安寧天皇	一二三—一五〇	一二	景行天皇	七三一—七九〇	二一	雄略天皇	一二六—一二九
四	懿德天皇	一五一—一八四	一三	成務天皇	七九一—八五〇	二二	清寧天皇	一二九—一二四
五	孝昭天皇	一八六—二六八	一四	仲哀天皇	八五二—八六〇	二三	顯宗天皇	一二四五—一二四七
六	孝安天皇	二六九—三七〇	一五	應神天皇	八六〇—九七〇	二四	仁賢天皇	一二四八—一二五八
七	孝靈天皇	三七一—四四六	一六	仁德天皇	九七三—一〇五九	二五	武烈天皇	一二五九—一二六六
八	孝元天皇	四四七—五〇三	一七	履中天皇	一〇六〇—一〇六五	二六	繼體天皇	一二六七—一二九一
九	開化天皇	五〇三—五六三	一八	反正天皇	一〇六六—一〇七〇	二七	安閑天皇	一二九一—一二九五

二八	宣化天皇	一一九五—一一九九	四〇	天武天皇	一三三二—一三四六
二九	欽明天皇	一一九九—一二三一	四一	持統天皇	一三四八—一三五七
三〇	敏達天皇	一二三二—一二四五	四二	文武天皇	一三五七—一三六七
三一	用明天皇	一二四五—一二四七	四三	元明天皇	一三六七—一三七五
三二	崇峻天皇	一二四七—一二五二	四四	元正天皇	一三七五—一三八四
三三	推古天皇	一二五二—一二八八	四五	聖武天皇	一三八四—一四〇九
三四	舒明天皇	一二八九—一三〇一	四六	孝謙天皇	一四〇九—一四一八
三五	皇極天皇	一三〇二—一三〇五	四七	淳仁天皇	一四一八—一四二四
三六	孝徳天皇	一三〇五—一三一四	四八	稱徳天皇	一四二四—一四三〇
三七	齊明天皇	一三一五—一三二一	四九	光仁天皇	一四三〇—一四四一
三八	天智天皇	一三二一—一三三二	五〇	桓武天皇	一四四一—一四六六
三九	弘文天皇	一三三二—一三三二	五一	平城天皇	一四六六—一四六九
			五二	嵯峨天皇	一四六九—一四八三
			五三	淳和天皇	一四八三—一四九三
			五四	仁明天皇	一四九三—一五一〇
			五五	文徳天皇	一五一〇—一五一八
			五六	清和天皇	一五一八—一五三六
			五七	陽成天皇	一五三六—一五四四
			五八	光孝天皇	一五四四—一五四七
			五九	宇多天皇	一五四七—一五五七
			六〇	醍醐天皇	一五五七—一五九〇
			六一	朱雀天皇	一五九〇—一六〇六
			六二	村上天皇	一六〇六—一六二七
			六三	冷泉天皇	一六二七—一六二九

六四	圓融天皇	一六二九—一六四四	七六	近衛天皇	一八〇一—一八一五
六五	花山天皇	一六四四—一六四六	七七	後白河天皇	一八一五—一八一八
六六	一條天皇	一六四六—一六七一	七八	二條天皇	一八一八—一八二五
六七	三條天皇	一六七一—一六七六	七九	六條天皇	一八二五—一八二八
六八	後一條天皇	一六七六—一六九六	八〇	高倉天皇	一八二八—一八四〇
六九	後朱雀天皇	一六九六—一七〇五	八一	安徳天皇	一八四〇—一八四五
七〇	後冷泉天皇	一七〇五—一七二八	八二	後鳥羽天皇	一八四五—一八五八
七一	後三條天皇	一七二八—一七三二	八三	土御門天皇	一八五八—一八七〇
七二	白河天皇	一七三二—一七四六	八四	順徳天皇	一八七〇—一八八一
七三	堀河天皇	一七四六—一七六七	八五	仲恭天皇	一八八一
七四	鳥羽天皇	一七六七—一七八三	八六	後堀河天皇	一八八一—一八九二
七五	崇徳天皇	一七八三—一八〇一	八七	四條天皇	一八九二—一九〇二
			八八	後嵯峨天皇	一九〇二—一九〇六
			八九	後深草天皇	一九〇六—一九一九
			九〇	龜山天皇	一九一九—一九三四
			九一	後宇多天皇	一九三四—一九四七
			九二	伏見天皇	一九四七—一九五八
			九三	後伏見天皇	一九五八—一九六一
			九四	後二條天皇	一九六一—一九六八
			九五	花園天皇	一九六八—一九七七
			九六	後醍醐天皇	一九七七—一九九九
			九七	後村上天皇	一九九九—二〇〇八
			九八	長慶天皇	二〇〇八—二〇四三
			九九	後龜山天皇	二〇四三—二〇五二

一〇〇	後小松天皇	二〇五―二〇七二	一〇九	明正天皇	二二八九―二三〇三	二八	後桃園天皇
一〇一	稱光天皇	二〇七二―二〇八八	一一〇	後光明天皇	二三〇三―二三二四	二九	光格天皇
一〇二	後花園天皇	二〇八八―二二二四	一一一	後西天皇	二三二四―二三三三	二一〇	仁孝天皇
一〇三	後土御門天皇	二二二四―二二六〇	一一二	靈元天皇	二三三三―二三四七	二一一	孝明天皇
一〇四	後柏原天皇	二二六〇―二二八六	一一三	東山天皇	二三四七―二三六九	二一二	明治天皇
一〇五	後奈良天皇	二二八六―二三二七	一一四	中御門天皇	二三六九―二三九五	二一三	大正天皇
一〇六	正親町天皇	二三二七―二三四六	一一五	櫻町天皇	二三九五―二四〇七	二一四	今上天皇
一〇七	後陽成天皇	二三四六―二三七二	一一六	桃園天皇	二四〇七―二四二三		
一〇八	後水尾天皇	二三七二―二三八九	一一七	後櫻町天皇	二四二三―二四三〇		

尋常小學國史　上卷

第一　天照大神

天皇陛下の御先祖天照大神の御徳

天皇陛下の御先祖を、天照大神と申しあげる。大神は御徳のたいそう高い御方で、はじめて稲や麥などを田畑にうゑさせたり、蠶をかはせたりして、萬民をおめぐみになつた。

大神の御弟に、素戔嗚尊といふ御方があつて、たびくあらくしい事をなさつた。それでも、大神は、いつも尊をおかはいがりになつて、少しもおとがめになることはなかつた。しかし、尊が大神の機屋をおけがしになつ

たので、大神は、とう〳〵天の岩屋に入り、岩戸を立てて御身をおかくしになつてしまつた。

大勢の神々は、たいそう御心配になつた。何とかして大神をお出し申さうと、岩戸の外に集つて、いろ〳〵御相談の上、八坂瓊曲玉や八咫鏡などを榊の枝にかけて、神樂をおはじめになつた。その時、天鈿女命のまひの樣子がいかにもをかしかつたので、神々はどつとお笑ひになつた。大神は、何事が起つたのかと、ふしぎにお思ひになり、少しばかり岩戸をお開きになつた。すぐさま、神々は榊をおさし出しになつた。大神の御すがたが、その枝にかけた鏡にうつつた。大神は、ます〳〵ふしぎにお思

素戔嗚尊が劍をおさし上げになつた

御孫をこの國におくだしになつた

ひになり、少し戸から出て、これを御らんにならうとした。すると、そばにかくれてゐた手力男命が、大神の御手を取つて、岩屋の中からお出し申しあげた。神々は、うれしさのあまり、思はず聲をあげて、およろこびになつた。

素戔嗚尊は、神々に追はれて、出雲におくだりになつた。さうして、簸川の川上で、八岐の大蛇をずた〳〵に斬つて、これまで苦しめられてゐた人々をおすくひになつたが、この時、大蛇の尾から一ふりの劍を得、これはたふといい劍であるとて、大神におさし上げになつた。これを天叢雲劍と申しあげる。

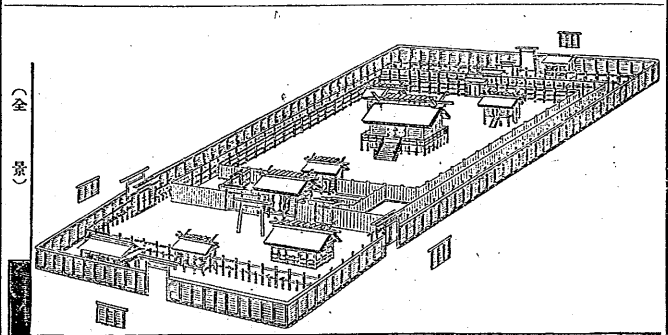
素戔嗚尊の御子に、大國主命といふ御方があつた。命は、

神勅をおくだしになつた

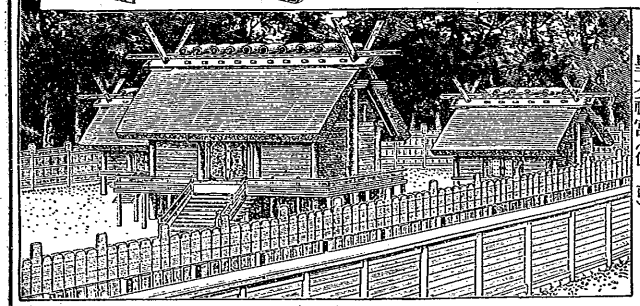
出雲をはじめ方々を平げられて、なかなか勢が強かつたが、その他の地方は、まだまだわるものが大勢ゐて、さわがしかつた。大神は、御孫の瓊瓊杵尊にこの國を治めさせようとお考へになり、まづ御使を大國主命のところへやり、その地方をさし出すやうにおさとしになつた。命は、よろこんで大神のおほせに從つた。そこで、大神は、いよ〳〵瓊瓊杵尊をおくだしにならうとして、尊に向ひ「この國は、わが子孫の王たるべき地なり。汝皇孫ゆきて治めよ。皇位の盛なること、天地と共にきはまりなかるべし。」とおほせになつた。萬世一系の天皇をいたゞいて、天地と共にいつの世までも動くことのないわが

わが國體の基

三種の神器をお授けになつた



（全景）



皇大神宮（側面）

國體の基は、實にこの時に定まつたのである。

大神は、また八坂瓊曲玉・八咫鏡・天叢雲劍を瓊瓊杵尊にお授けになつた。これを三種の神器と申しあげる。尊は、この神器をさゝげ、大勢

皇大神宮

の神々を從へて、日向へおくだりになつた。これから神器は、御代々の天皇がおひきつぎになつて、皇位の御しるしとなさることになつた。

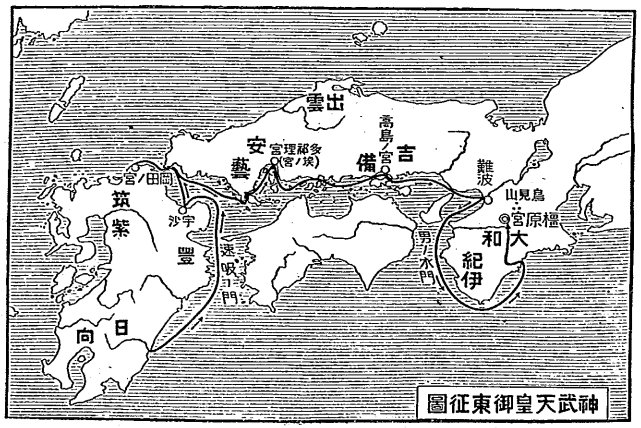
大神は、神器を尊にお授けになる時、「この鏡をわれと思ひて、つねにあがめまつれ。」とおほせになつた。それ故、この御鏡を御神體として、伊勢の皇大神宮に大神をおまつり申し、御代々の天皇をはじめ、國民すべてが深く御うやまひ申しあげてゐるのである。

天照大神―天忍穗耳尊―瓊瓊杵尊―彦火火出見尊―鸕鷀草葺不合尊―神武天皇

第二　神武天皇

大和へお向ひになつた

瓊瓊杵尊から神武天皇の御時にいたるまでは、御代々、日向においでになつて、わが國をお治めになつた。けれども、東の方は、なほわるものが大勢ゐて、たいへんさわがしかつた。それ故、天皇は、これらのわるものどもを平げて、人民を安心させようと、舟軍をひきゐて、日向から大和へお向ひになつた。さうして、途中所



神武天皇御東征圖

大和におはいりになつた

所にお立寄りになり、そのあたりを平げつゝ、長い間かゝつて難波におつきになつた。

天皇は、河内から大和へお進みにならうとした。わるものどものかしらに長髓彦といふものがゐて、地勢を利用して御軍をふせぐので、これをうち破つて大

神武天皇がけはしい山道をお進みになつた

大和地方をお平げになつた

和へおはいりになることは、むづかしかつた。そこで、天皇は、道をかへて、紀伊からおはいりになることになつた。そのあたりは、高い山や深い谷があり、道のないところも多かつたので、ひととほりのお苦しみではなかつた。しかし、天皇は、ますます勇氣をふるひおこされ、八咫烏を道案内とし、兵士をはげまして、道を開かせながら、とうゝ大和におはいりになつた。

天皇は、それから、しだいにわるものどもを平げ、ふたたび長髓彦をお攻めになつ

御即位の禮をお擧げになつた

紀元元年

たしかし、長髓彦の手下のものどもが、いつしやうけんめいに戰ふので、御軍もたやすく勝つことが出來なかつた。時に、空がにはかにかきくもり、雹が降出した。すると、どこからともなく金色の鵄が飛んで來て、天皇のお持ちになつてゐる御弓のさきにとまつて、きら〳〵と強くかゞやいた。そのため、わるものどもは、目がくらんで、もはや戰ふことが出來なくて、まけてしまつた。長髓彦も、まもなく殺された。

やがて、天皇は、宮を畝傍山の東南にあたる橿原にお建てになり、はじめて御即位の禮をお擧げになつた。この年をわが國の紀元元年としてゐる。さうして、二月十一

紀元節

御先祖の神神をおまつりになつた

神武天皇祭

日は、またこのめでたい日にあたるので、國民はこぞつて、この日に紀元節のお祝をするのである。

天皇は、また御孝心の深い御方で、御先祖の神々を鳥見山におまつりになつた。かやうに、天皇は、天照大神のお定めになつたわが帝國の基を、ます〳〵固めて、おかくれになつた。そのおかくれになつた日に毎年行はれる御祭は、四月三日の神武天皇祭である。

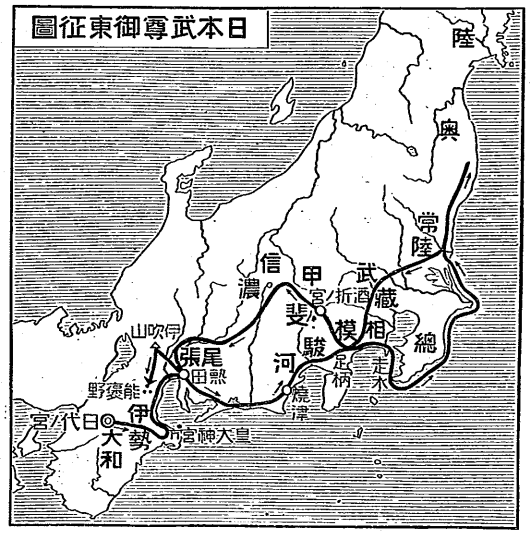
第三　日本武尊

神武天皇が大和におうつりになつて後は、天皇の御威光はおひ〳〵四方にひろがつていつた。けれども、都か

熊襲をお平げになつた

ら遠くはなれた東西の國々には、なほわるものが大勢ゐて人民を苦しめてゐた。

第十二代景行天皇の御代になつて、九州の南の方に住んでゐる熊襲がそむいたので、天皇は、御子の小碓尊にこれをお討たせになつた。尊は、御生まれつきくわつぱつで、その上御力もたいそう強い御方であつたから、この頃まだ十六の少年でいらつしやつたが、おほせを受けると、すぐ九州へお出かけになつた。熊襲のかしらの川上のたけるは、かうしたことがあらうとは夢にも知らず、大勢のものといつしよに酒を飲んで樂しんでゐた。尊は、御髪をとき、少女の御すがたになつて、たけるに近づき、劍をぬいてその胸をお刺しとほしになつた。不意をうたれたたけるは、たいへん驚いて、「何とお強いことでせう。あなたは實に日本一の強い御方です。これからは、日本武と御名のりなされよ。」と申しあげて、息が絶えた。尊は、そこで御名をお改めになり、めでたく大和にお歸りになつた。



東國へお向ひになつた

その後、東の國の蝦夷がそむいたので、天皇はまた尊にこれをお討たせになることになつた。尊は、いさみいさんで都をお立ちになり、まづ伊勢に行つて皇大神宮に參詣し、天叢雲劍をいたゞいて、東の國へお向ひになつた。

日本武尊が御劍をぬいて草薙ぎ

草薙劍

尊が駿河の國におつきになつた時、その地のわるものどもは、鹿狩をするからと、尊をだまして、廣い野原におさそひした。さうして、急に草をやきたてて、尊を害しようとはかつた。尊は、天叢雲劍をぬいてあたりの草を薙ぎはらひ、大いにおふせぎになつたので、わるものどもは、かへつて、自分のつけた火にやかれて、すつかりほろぼされてしまつた。これから、この御劍を草薙劍と申しあげ

はらひなさつた

蝦夷をお平げになつた

尊の御てがら

ることとなつた。

尊は、なほも軍を東にお進めになつたが、蝦夷どもは、御勢に恐れて、弓矢をすてて降參した。かやうにして、尊は國々をお平げになつたが、都へお歸りになる途中、御病のため、とうゝ おなくなりになつた。

尊はたふとい御身でいらつしやるのに、つねゝ 兵士といつしよに難儀をおしのびになり、少年の御時から、西に東にわるものどもをお討ちになつて、少しも御身をおやすめになるおひまがなかつた。さうして、天皇の御位にお卽きにならぬうちに、おなくなりになつたのである。けれども、尊の御てがらにより、遠いところまで

熊襲をお討ちになつた

新羅をお討ちになつた

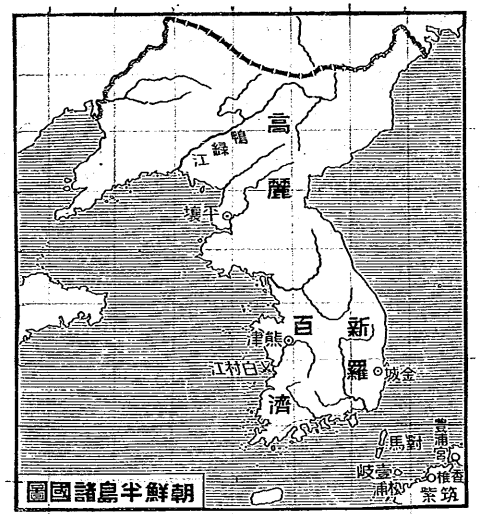
平いで、世の中はたいそうおだやかになつた。尊の御子が、後になつて、天皇の御位にお卽きになつた。この御方を第十四代仲哀天皇と申しあげる。

第四　神功皇后

仲哀天皇の皇后を、神功皇后と申しあげる。皇后は御生まれつきお賢く、またをゝしい御方であつた。天皇の御代に熊襲がまたそむいたので、天皇は皇后と御いつしよに九州へ下つて、これをお討ちになつたが、まだよくしづまらないうちに、おかくれになつた。

この頃、朝鮮には新羅・百濟・高麗の三國があつて、これを

三韓



三韓といつた。中でも、新羅は一ばんわが國に近くて、その勢はたいそう強かつた。それで熊襲がたびくくそむくのは、新羅がこれを助けるためであるから、新羅を從へたなら、熊襲はしぜんと平ぐであらうと、皇后はお考へになり、武内宿禰と御相談になつて、御みづから兵をひきゐて新羅をお討ちになることになつた。時に紀元八百六十年である。

三韓を從へなさつた

皇后は、舟軍をひきゐて、對馬にお渡りになり、それから新羅におし寄せられた。軍船は海にみちくくて、その御勢はたいそう盛であつたから、新羅王は非常に恐れて、「われは、日頃東の方に日本といふ神國があつて、天皇と申す御方がいらつしやると聞いてゐる。

神功皇后がはるかに新羅の方を御らんになつた

皇后の御てがら

今、攻めて來たのは、きつと日本の神兵にちがひない。さうとすれば、どうしてふせぐことが出來よう。」といつて、すぐ白旗をあげて降參し、皇后の御前に來て、「たとひ太陽が西から出、川の水がさかさまに流れるやうなことがあつても、決して毎年の貢はおこたりません。」とおちかひ申しあげた。ほどなく皇后は御凱旋になつたが、その後、百濟・高麗の二國もまたわが國に從つた。

これから、朝鮮も朝廷の御威德によくなびいたので、熊襲もしぜんにしづまつた。また第十五代應神天皇の御代に、王仁といふ學者などが百濟から來て學問を傳へ、機織や鍛冶などの職人もつぎ〳〵に渡つて來て、これらの

人民をおあはれみになつた

人々によつて、わが國はますく〳〵開けた。これは、全く神功皇后の御てがらによるものである。

第五　仁德天皇

第十六代

仁德天皇は、應神天皇の御子で、御なさけ深く、いつも人民をおあはれみになつた。天皇は、都を難波におさだめになつたが、皇居はいたつて質素な御つくりであつた。天皇は、ある日、高い御殿におのぼりになり、四方をおながめになると、村々から立ちのぼるかまどの煙が少かつたので、これは、きつと不作で食物が足らないためであらう。都に近いところでさへこんな有樣である

から、都を遠くはなれた國々の人民はどんなに苦しんでゐることだらうと、ふびんにお思ひになり、三年の間は稅ををさめなくてよいとおほせ出された。そのため、皇居はだん〳〵あれてきたが、天皇は少

仁德天皇が盛に立ちのぼるかまどの煙を御らんになつた

人民がよろこんで皇居をお造り申した

しも御氣にもおかけにならず、御召しものさへ新しくおつくりになることもなかつたくらゐである。

そのうちに、豐年がつゞいて、村々の煙も盛に立ちのぼるやうになつた。天皇は、これを御らんになつて、「われは、もはやゆたかになつた。」とおほせられ、人民がゆたかになつたことを、この上なくおよろこびになつた。人民は、皇居がたいへんあれくづれてゐると傳へ聞いて、もつたいなく思ひ、稅ををさめ、また新しく皇居をお造り申しあげたいと願ひ出たが、天皇はお許しにならなかつた。けれども、人民は、なほ熱心にたび〳〵お願ひ申したので、その後三年たつて、やうやくお許しになつた。人民

農業をおすすめになつた

は、よろこびいさんで、われ先にとはせ集り、夜を日についで、いつしやうけんめい工事にはげんだので、皇居はわづかの間に美しく出來上つた。

天皇は、なほ人民のためをおはかりになつて、堤を築かせたり、池を掘らせたりして、農業をおすゝめになつた。それ故、人々は、皆深く天皇の御恩に感じて、それ〴〵自分のつとめにはげんだので、世の中がよく治つた。

政治をおとりになつた

第六　聖德太子

仁德天皇から御十八代めの天皇を、第三十三代推古天皇と申しあげる。天皇は女帝でいらつしやつたから、御甥の聖

攝政

十七條の憲法をお定めになつた

德太子を攝政として、政治をおまかせになつた。

太子は御生まれつき人にすぐれてお賢く、一時に十人の訴をあやまりなくお聞分けになつたとさへ傳へられてゐる。その上、朝鮮の學者について深く學問をおをさめになつたので、進んだ御考をおもちになり、朝鮮や支那のよいところを取入れて、いろ〳〵新しい政治をおはじめになつた。さうして、遂には十七條の憲法を定めて、官吏も一般の人民も、皆つねに心得ておかねばならないことをお示しになつた。

使を支那におやりになつた

太子は、また使を支那にやつて、外國とのつきあひをおはじめになつた。その頃、支那は國の勢が強く、學問など

も非常に進んでゐたから、日頃高ぶつて、他の國々を皆屬國のやうに取りあつかつてゐた。けれども、太子は、少しもその勢にお恐れになることなく、かの國に送られた國書にも、「日出づる處の天子、書を日沒する處の天子にいたす、恙なきか。」とお書きになつて、どこまでも對等のつきあひをなさつた。支那の國主は、これを見て腹を立てたが、ほどなく使をわが國に送つてきた。そこで、太子も、あらためて留

聖德太子

學生をおつかはしになつた。その後、引きつゞいて互にゆききをするやうになつたから、これまで朝鮮を通つてわが國に渡つて來た學問などは、これからは、すぐ支那から傳はることとなつた。

佛教をおひろめになつた

さきに、太子の御祖父でいらつしやる第二十九代欽明天皇の御代に、佛教がはじめて百濟から傳はつて來た。太子は、深くこれを信仰して、多くの寺をお建てになつたり、またしたしく教をお說きになつたりして、熱心に御力をつくされたので、これから佛教はだんゝ國内にひろまつた。かうして佛教がひろまるにつれて、建築やその他の技術なども、目立つて進んだ。太子のお建てになつ

法隆寺

た寺の中で名高いのは、大和の法隆寺で、そのおもな建物は、今も昔のまゝであるといはれ、わが國で一ばん古い建物である。

人々が太子をお惜しみ申した

かやうに、太子は、内に於ても、外に對しても、大いにわが國の利益をおはかりになつたが、まだ御位にお卽きにならないうちに、御病のため、とう〳〵おなくなりになつた。この時、世の中の人々は、親を失つたやうに、皆なげきかなしんだ。

第七　天智天皇と藤原鎌足

蘇我氏の不忠

推古天皇の御代の前後に、最も勢があつたのは、蘇我氏

である。蘇我氏は武内宿禰の子孫で、代々朝廷の政治にあづかつてゐたため、勢の盛なのにまかせ、しだいにわがまゝなふるまひが多くなつた。蘇我蝦夷は、推古（第三十四代）舒明（第三十五代）皇極の三天皇にお仕へ申したが、たいへん心のよからぬものであつたから、勝手に大勢の人民を使つて生前から自分たちの墓を作り、おそれ多くも、これを陵といつた。この時、聖德太子の御女は、「天には二つの日なく、國には二人の君はない。しかるに、なぜかやうなわがまゝをするのか。」と、大いにこれをおしかりになつた。蝦夷の子入鹿は、父にもましてわがまゝなふるまひが多かつた。殊に、自分に緣のある皇族を御位にお卽か

中大兄皇子鎌足と入鹿をお除きになつた

せ申しあげようと、聖徳太子の御子孫をほろぼし、はては自分の家を宮、その子らを王子と呼ばせて、少しもはばかるところがなかつた。蝦夷父子のやうなものは、朝廷を恐れたてまつらぬ不忠の臣といはねばならぬ。

中臣鎌足は、この有様を見て大いに怒り、朝廷の御ために、どうかして入鹿父子をほろぼさうと決心した。この頃、舒明天皇の御子中大兄皇子も、またかねてから蘇我氏のわがまゝなふるまひをおにくみになつてゐたので、鎌足は、何とかして自分の心を皇子にうちあけたいものと思つてゐた。ところが、ある時、皇子の蹴鞠の御遊にまゐりあひ、御そば近くにゐると、皇子の御靴がぬげ

中臣鎌足が御靴を中大兄皇子にさし上げた

た。これをとつてさし上げたのが縁となり、これから皇子にお親しみ申して、ひそかに、同じ志の人々といつしよに、謀をめぐらしてゐた。けれども、入鹿は、なか〳〵用心深くて、家のめぐりに池を掘つて城のやうにかため、出入の時には、大勢の人々を従へ、少しもゆだんをしなかつた。たまたま皇極天皇の御代に、三韓

から貢物をさし上げることがあつて、大極殿で行はれる式に、入鹿も參列するから、その折をさいはひに、これをほろぼすこととなつた。皇子は、御自身でほこをお持ちになり、鎌足らは、弓矢や劍などを持つて、御殿のわきにかくれてゐた。しかし、人々は、入鹿の勢に恐れて、ためらつてゐた。皇子はたまりかねて、をゝしくもまつさきにお進みになつた。そこで、人々もこれにつゞいて、とうとう入鹿を斬り殺してしまつた。皇子は、あらためて天皇の御前に進み、つゝしんで入鹿の不忠を申しあげられた。

蘇我氏がほろびた

この時、蝦夷は家にゐたが、入鹿が殺されたことを聞く

尋史上

と、すぐ人々を呼集めて、皇子と戰はうとした。皇子は、さつそく人をやつて、わが國には昔から君臣の別があつて、これをみだすのは不忠であるわけを、ねんごろに說聞かせられたので、人々は、ちりぐに逃去り、蝦夷も、家に火をつけて自害した。

武内宿禰―蘇我石川……馬子―蝦夷―入鹿

大化の新政をおこなつたすけ

第八　天智天皇と藤原鎌足（つゞき）

皇極天皇は、ほどなく、御位を御弟の第三十六代孝徳天皇にお讓りになり、中大兄皇子は、皇太子にお立ちになつた。皇太子は、天皇をおたすけになつて大いに政治を改め、こ

れまで勢のあるものが、たくさんの土地をもつて、勝手に人民を使つてゐた習はしをやめさせ、これらの土地や人民をすつかり朝廷にをさめさせられた。この新しい政治を大化の新政といふのである。大化とは、この時お定めになつた年號である。これが年號の始で、その元年は、紀元一千三百五年にあたつてゐる。

年號の始

孝德天皇がおかくれになると、皇極天皇がふたたび御位にお卽きになつた。第三十七代齊明天皇と申しあげる。中大兄皇子は、なほ皇太子として、引きつゞいて政治にあづかつておいでになつた。この頃、支那は唐の代で、勢がたいへん盛であつたから、新羅はその助をかりて百濟を

百濟をおすくはせになつた

ほろぼさうとした。百濟の人々は、朝廷にすくつていただきたいと願つてきた。皇太子は、天皇に從つて、すぐ九州に下られたが、天皇が行宮でおかくれになつたので、その御あとを受けついで御位にお卽きになつた。第三十八代天智天皇と申しあげる。天皇は、兵を出して百濟をすくはさせられたが、運わるくわが軍が戰にまけたので、百濟はやがてほろびてしまつた。そこで、天皇は、このまゝわが軍をながく海外にとゞめておいても、何の利益もないとお考へになつて、とうゝ、これを引きあげさせられた。まもなく、高麗もまた唐にほろぼされたので、新羅がひとり勢を振るふやうになり、これから朝鮮は、全

國内の政治を改めなさつた

くわが國からはなれてしまつたのである。けれども、唐とは、この後も、つきあひをやめるやうなことはなかつた。

これから、天皇は、御心を一筋に國内の政治にお向けになり、まづ都を近江にうつされ、また鎌足にいひつけて、いろ〳〵新しい法令を定めさせられた。この法令は、第四十二代文武天皇の大寶の御代になつて大いに改められ、大寶律令といつて、ながく政治の本となつたのである。

大寶律令

鎌足のてがら

中臣鎌足は、さきに蘇我氏をほろぼしてから、二十年餘りの長い間、眞心こめて朝廷にお仕へ申しあげ、てがらが多かつたので、天皇はいつも重くお用ひになつてゐた。鎌足が大病にかゝつた時には、おそれ多くも、その家に行幸をなさつて、したしく病氣をおいたはりになり、「何でも望むことがあるなら遠慮なく申せ」とおほせられた。鎌足は、深く天皇の御恩に感激して、「私のやうなおろかな身に、何のお望み申しあげることがございませう。たゞ一つ、どうか私の葬儀をてあつくなさらないやう、お願ひ申しあげます」とお答へ申しあげた。しかし、天皇は、やがて鎌足に最も高い位をお授けになり、また藤原といふ姓をお與へになつた。後に榮えた藤原氏は、この時に始つたのである。鎌足は、大和の談山神社にまつられてゐる。

藤原氏の始

尋史上

奈良時代

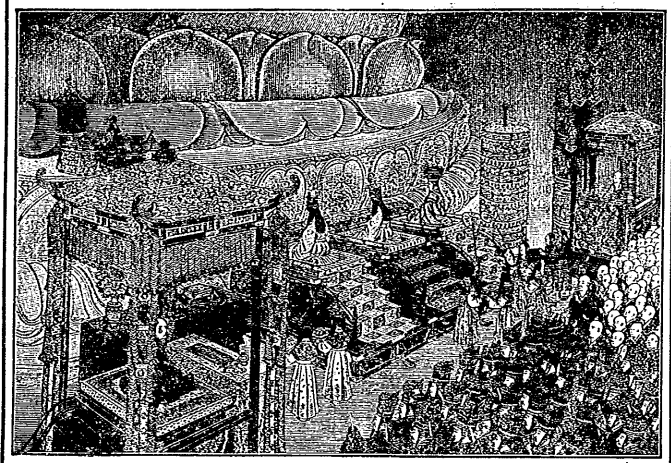
一ばん盛な御代

第九　聖武天皇

文武天皇の御次に、第四十三代元明天皇が御位にお卽きになつた。天皇は、紀元一千三百七十年（和銅三年）、都を大和の奈良におさだめになつた。これまでは、都はたいてい御代ごとにかはる習はしであつたが、これから御七代、七十年餘りの間は、おほむね奈良の都にいらつしやつたから、この間を奈良時代といふのである。

奈良時代の中で一ばん盛であつたのは、第四十五代聖武天皇の御代である。この頃は、たびく唐とゆききして、世の中がたいそう開けていつた。それで、都も唐の風にならつてりつぱになり、宮殿などの建物は、壁を白く、柱を赤

佛教を盛になさつた



大佛供養

くぬり、青瓦で屋根をふいて、まるで繪のやうな美しさであつた。さうして、人々の服裝も一樣にはなやかになつた。

聖武天皇は、日頃あつく佛教を御信仰なさつた。それ故、この教をひろめて、世の中がおだやかによく治るやうにしたいものとお考へになつて、

國分寺
東大寺

國ごとに國分寺を造らせられた。取分け、奈良には、大和の國分寺として、東大寺を建てさせ、大佛を鑄てこれをまつらさせられた。その大佛殿は、後にたびたび造りかへられたが、高さが十五丈餘りもあつて、木造の建物では世界第一といはれてゐる。また大佛も高さが五丈餘りもあつて、その大きいのに驚かぬものはない。

光明皇后

聖武天皇の皇后は、藤原鎌足の孫でいらつしやつて、世に光明皇后と申しあげる。皇后も、またあつく佛教を御信仰になつた。御生まれつき御なさけ深く、貧しい人々のために病院を建てて、藥をおめぐみになり、また孤兒を集めてこれを養はせ、ひろく人民をおいたはりになつた。

行基と道鏡

佛教がだんだん盛になると、えらい僧がつぎつぎに出てきた。中でも、行基は、諸國を旅行して、いたるところで、寺を建て、道を開き、橋をかけ、池を掘り、舟つきを定めなどして、大いに世の中の利益をおこしたので、人々からたいへんうやまはれた。けれども、一方には、道鏡のやうな心のわるい僧も出た。

清麻呂が宇佐にいつた

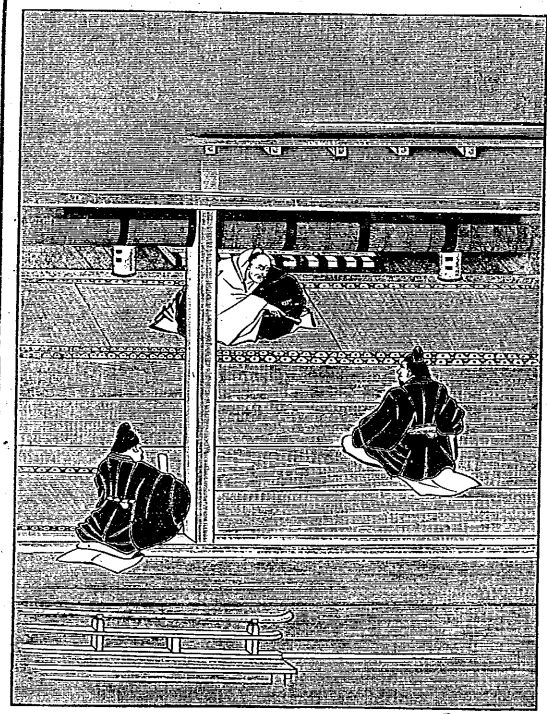
道鏡は第四十八代稱德天皇の御代、朝廷にお仕へして、政治にもあづかり、勢が強かつた。たまたま道鏡にへつらつて

神の教を申しあげた

ゐたものが、宇佐八幡の御告であるといつはつて、「道鏡を皇位に卽かせると、天下はおだやかに治りませう。」と、天皇に申しあげた。道鏡はこれを聞いて、たいそうよろこんだが、天皇はもう一度神の教を受けてくるやうにと、和氣清麻呂を宇佐におやりになつた。

清麻呂が宇佐に行かうとした時、道鏡は清麻呂に向つて、「高い官位を與へるから、自分によいやうにはからつてもらひたい。」といつて、利を以て味方にさそひ入れようとした。けれども、清麻呂は、忠義の志の深い、りつぱな人であつたから、決して自分の出世のためにその志をかへるやうなことはなかつた。宇佐から歸つてくると、

すぐ天皇の御前に進み出て、「わが國は、國の初から、君と臣との別は明らかに定まつてゐる。どんなことがあつても、臣であるものを君とすることはない。無道のものは早く除け。」といふ神の教を、少



和氣清麻呂が神の教を申しあげた

清麻呂の忠義

しも恐れるところなく、そのまゝ、きつぱりと申しあげた。

道鏡は大いに怒つて、清麻呂を大隅に流し、しかも、その途中で殺させようとした。その時、ちやうどはげしい雷雨があつたため、清麻呂は、危いところをやつとまぬかれることが出來た。それから、まもなく、第四十九代光仁天皇の御代になつて、道鏡は下野に追ひやられたが、清麻呂は呼びかへされ、第五十代桓武天皇の御代まで朝廷にお仕へ申して、ますゝ忠義をつくし、重い役に用ひられた。今は、京都の護王神社にまつられてゐる。わが國の臣民は、皆つねに清麻呂のやうな心がけを忘れてはならぬ。

姉の廣虫

清麻呂の姉の廣虫も、また眞心こめて朝廷にお仕へ申しあげ、弟ともたいへん仲がよかつたので、人々は皆感心してゐた。清麻呂が流された時、廣虫も備後に流されたが、清麻呂といつしよに呼びかへされて、ふたたび朝廷に用ひられた。廣虫は、つゝしみ深い人で、一度も他人のかげ口をいつたことがなく、またなさけ深くて、たくさんの棄兒を拾ひ集めて、育てあげたが、その數は八十人餘りにも及んだといふことである。今は、廣虫も護王神社に合はせまつられてゐる。

第十一　桓武天皇

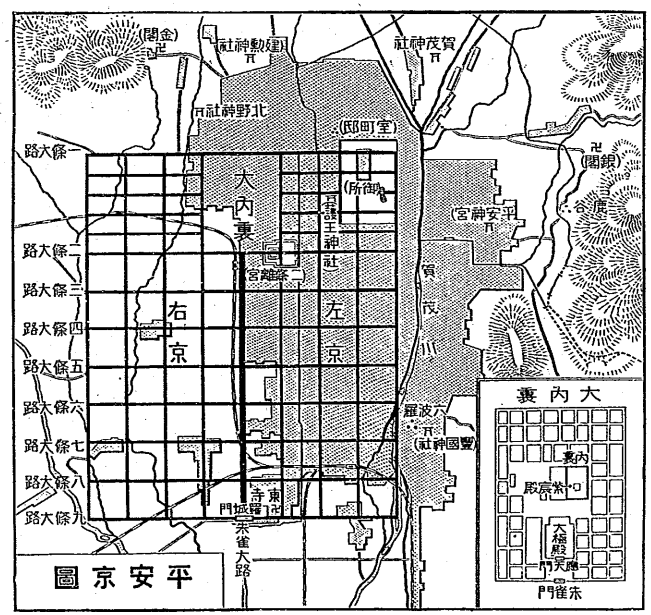
都を京都におさだめになつた

桓武天皇は、光仁天皇の御子である。天皇は和氣清麻呂の申し出た意見をおとりあげになつて、今の京都の地が、山河のうるはしい上に、便利がよいので、紀元一千四百五十四年（延暦十三年）、都をここにおさだめになつた。四方から集つて來た人民は、皆よろこんで、この新しい都を平安京といつた。これから明治の初まで一千七十年餘りの間、御代々の天皇は、たいていこの都にいらつしやつた。

桓武天皇

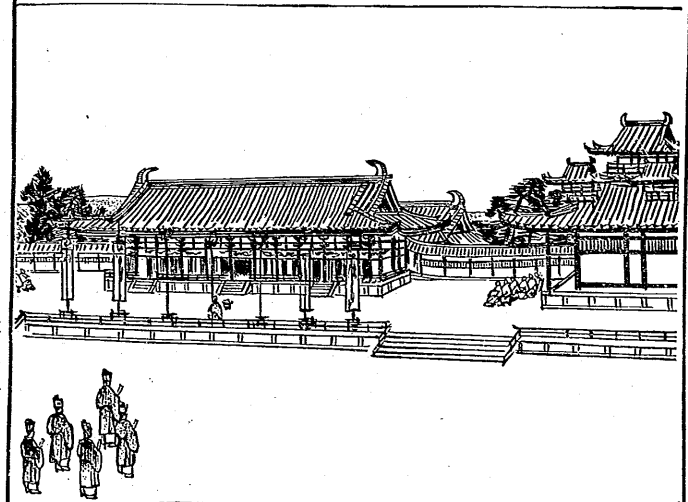
平安京の有様

平安京は、奈良の都にまねてあつたが、かまへはそれよりもずつと大きかつた。都の中央には、南北に通ずる大道があつて、京が二つに分れ、その上、碁盤の目のやうに、幾筋もの道路が縱



平安京圖

横に開かれて、實によくとゝのつてゐた。大道の北の端には大内裏があつて、その中に内裏や大極殿や諸官省があつた。内裏は天皇のいらつしやる所で、紫宸殿をはじめ、たくさんの御殿がある。大極殿は大事な御儀式を行はせられる所



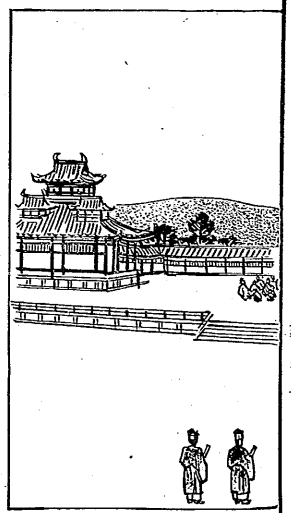
大極

平安神宮

坂上田村麻呂に蝦夷をお討たせになつた

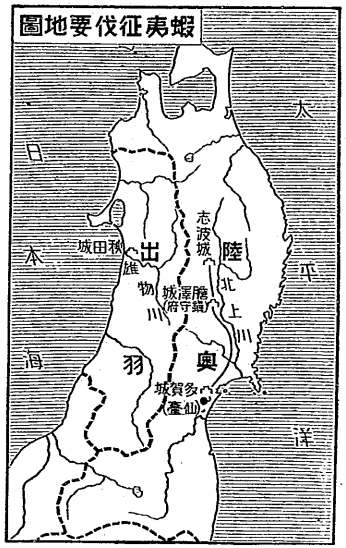
で、今、桓武天皇をおまつりしてある京都の平安神宮は、この御殿の形をうつして造つたものであるから、これによつて昔の有様をだいたい知ることが出來る。

さきに、日本武尊が蝦夷を御征伐なさつたが、その後、齊明天皇の御代に、阿倍比羅夫がふたたび舟軍をひきゐて、日本海の海岸地方でさわいでゐた蝦夷をうち平げた。けれども、太平洋にのぞんでゐる地方の蝦夷は、なほたびく〳〵そむいて人民を苦しめてゐたので、桓武天皇



殿

は坂上田村麻呂を征夷大將軍としてこれをお討たせになつた。田村麻呂は、勇武な生まれつきで、ひとたび怒ると猛獸でも恐れて逃出すほどであつたが、またなさけ深くやさしい人で、笑ふ時には、幼兒でも親のやうになつついて、はひ寄つたといふことである。田村麻呂は、兵をひきゐて出征し、いたるところでてがらをたて、とうく今の陸中にまで進んで、賊をうち平げたので、これから、東北の地方は、



田村麻呂のてがら

はじめておだやかになつた。

田村麻呂は、そのてがらによつて、朝廷からあつくお褒めにあづかつた。さうして、官や位がしだいに高くなつて、第五十二代嵯峨天皇の御代になくなつた。天皇は、これをたいそう惜しませられ、特に山科に墓地をたまはり、屍を平安京の方に向け、武器をそへて、おてあつく葬らせられた。これから後、將軍となつて出征する人々は、皆この墓に參詣して、勝利を祈つたといふことである。

第十二　最澄と空海

桓武天皇から御數代の間は、國内がよく治つた上に、最

最澄が天台宗を傳へた

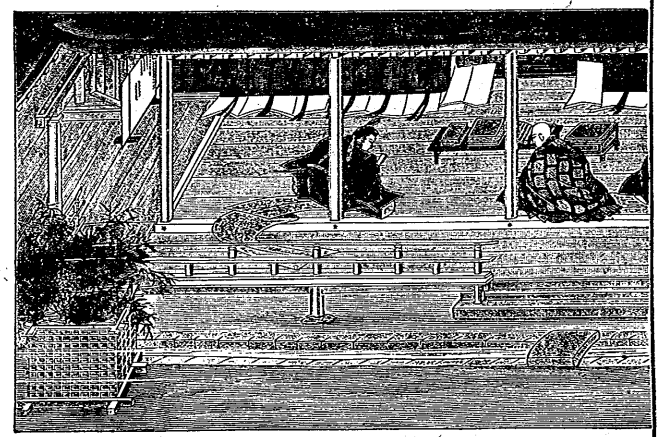
人々の便利をはかり多くの弟子を養つた

澄・空海といふ名高い僧もあらはれて、世の中はますます開けていつた。

最澄は近江の人で、桓武天皇の御代に、比叡山のいたゞきに寺を建て、みづから佛像をきざんで、こゝにまつつた。天皇の御信任があつく、そのおほせを受けて、唐に渡つて佛教を學び、たくさんの經文を持ちかへつて、朝廷にさし上げた。その傳へた新しい宗旨は、天台宗といふのである。

最澄は、諸國をまはつて熱心に教をひろめたが、その間にも、人里はなれた山中

空海が眞言宗を傳へた



澄が經文を朝廷にさし上げた

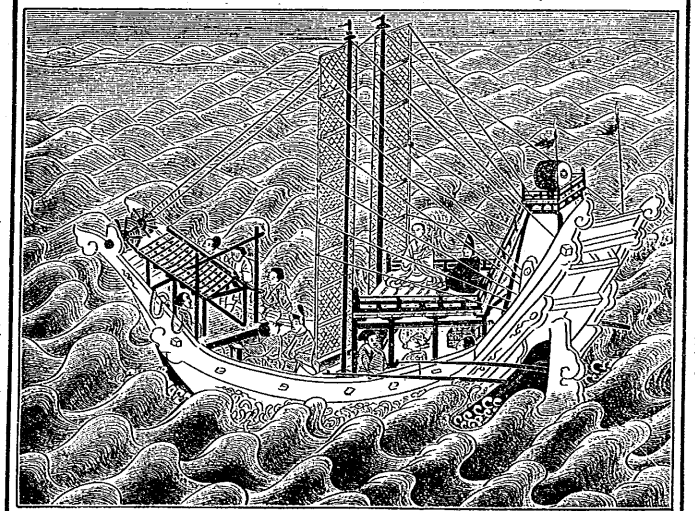
に宿屋を建てて、旅人の便利をはかつた。また大勢の弟子を養つて宗旨を研究させたので、學問の深い僧が、多く世に出るやうになつた。

空海は讃岐の人で、生まれつき賢く、神童のほまれが高かつたが、なほ一心に勉強して、學問がますゝ深くなつた。さうして最澄と

學問をひらめ世の人の利益をはかつた

いつしよに唐におもむいて佛教を學び、三年の後に歸つて來て、眞言宗といふ新しい宗旨を傳へた。それから嵯峨天皇のあつい御信任をいたゞいて、はじめて紀伊の高野山を開いた。

空海も諸國をめぐつて盛に宗旨をひろめ



空海が唐に渡つた

おくり名をたまはつた

つゝ世の中のためになることをはかつた。殊に、讃岐に萬農池の堤を築いて、今に至るまで利益を與へてゐる。また京都に學校を建てて、身分の貴いとか賤しいとかの區別なく、ひろく人々の入學を許して、いろ〳〵の學問を授けた。なほ空海は詩文にすぐれ、取分け文字がたくみであつた。かのいろは歌も空海が作つたものであらうと傳へてゐる。

これから佛教はます〳〵ひろまり、學問もしだいに盛になつて、世の人々はながく最澄・空海の二人をうやまつた。後に朝廷から、最澄には傳教大師、空海には弘法大師のおくり名をたまはつた。

第十三　菅原道眞

藤原氏ひとりが勢を得た

平安京の御代の初頃は、朝廷の御威光が盛であつたが、まもなく藤原氏がだん〳〵勢を振るふやうになつた。藤原氏は、その先祖の鎌足が、大功をたてて重く用ひられてからは、世々大臣となるものが多く、光明皇后から後は、御代々の皇后もたいていこの氏からお出になる習はしとなつた。それ故、藤原氏の一門には、攝政や關白の高い官職にのぼるものもあつて、朝廷の政治を思ふまゝに動かすことが出來たので、藤原氏に緣のないものは、すつかり勢を失つてしまつた。

攝政關白

道眞が重く用ひられた

第五十九代宇多天皇は、藤原氏の勢があまりに強いので、どうかしてこれをおさへようとお考へになり、菅原道眞を重く用ひて、その勢を分たうとなさつた。道眞は、學者の家に生まれて、幼い時から學問にはげみ、十一二歳の頃には、すでに詩を作つて人々を驚かしたくらゐで、やがて名高い學者となつた。その上、心の正しい、りつぱな人であつたから、朝廷に仕へるやうになると、天皇の御信任が深かつた。

道眞が時平と政治を行つた

宇多天皇の御次に、御子の第六十代醍醐天皇が御位にお即きになつた。天皇は、いたつて御なさけ深く、ある寒い夜、御衣をおぬぎになつて、貧しい人民のつらさをしたしくお思ひやりくださつたほどの御方であつた。天皇も、

筑前にうつされた

また御父の御志をお受けつぎになつて、道眞を右大臣に引きあげて、左大臣の藤原時平と並んで政治を行はしめられた。

ところが、時平は、もとく、よい家がらの生まれではあるが、年が若い上に、學問もたうてい道眞にかなはなかつたので、天皇の御信任は、道眞のやうにあつくはなかつた。それ故、不平のあまり、道眞を、天皇にいろく、あしざまに申しあげた。これがため、道眞は官職をおとされて、筑前の太宰府にうつされた。

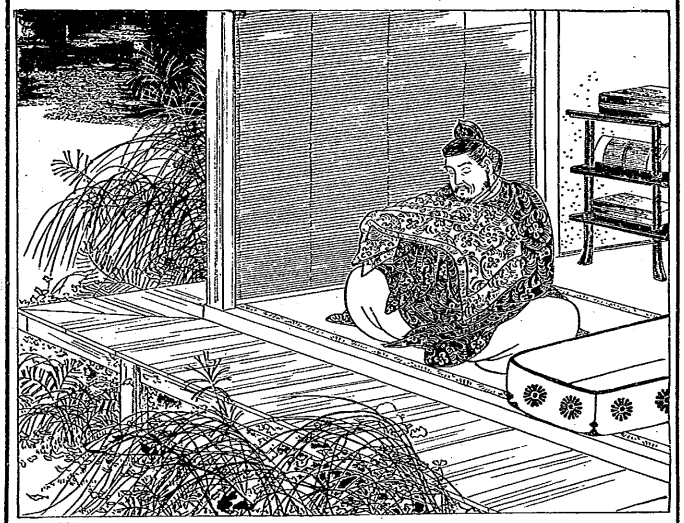
道眞は、家を出る時、日頃愛してゐた庭の梅にまで名殘を惜しんで、

かた時も天皇の御事をお忘れ申さなかつた

こちふかばにほひおこせよ、梅の花、
　あるじなしとて春をわするな。

といふ一首の歌をよんだ。それから海を渡つてはるばる筑前に下つたが、その後も門を堅く閉ざして一室にきんしんし、かた時も天皇の御事をお忘れ申すことはなかつた。いつのまにか、春が去つて夏もすぎ、はや九月十日となつた。ちやうど去年の今日今夜こそ宮中の御宴の席にはべり、詩をさし上げて天皇の御心にかなひ、御衣をいたゞいた日であることを思ひ出しては、今更のやうに、君恩のかたじけなさに感じ入り、恩賜の御衣をさゝげて、涙ながらにあつく御禮を申しあげ、詩を作

天滿天神



菅原道眞が御衣をさゝげて詩を作つた

つてその眞心を述べたのであつた。

かうして、道眞は、太宰府でつゝしんでゐること三年に及んだが、とう〳〵病氣にかゝつて、そこでなくなつた。けれども、後になつて、道眞に罪のないことが明らかになり、朝廷からは、高い官位を

贈られ、また世の人々は、天滿天神とあがめうやまつた。

さうして、京都の北野神社や筑前の太宰府神社をはじめ、全國いたるところにまつられてゐる。

藤原氏が勝手に政治を行つた

藤原鎌足―不比等……冬嗣―良房―基經―時平
　　└忠平

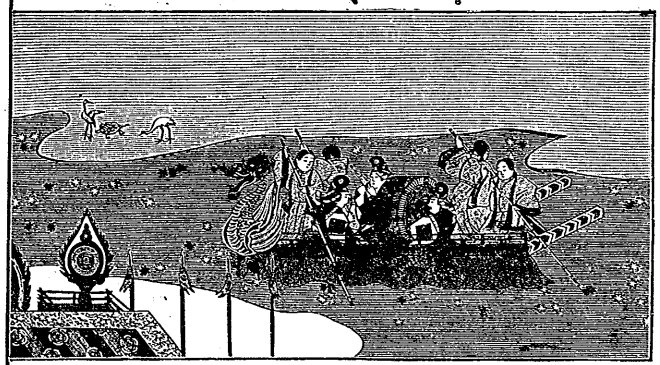
第十四　藤原氏の專横

菅原道眞がしりぞけられて、宇多天皇のせつかくの御志もむだになつた後は、藤原氏は、勢がますます盛になり、勝手に朝廷の政治を行つて、何でもその思ひ通りにならないものはなかつた。しかも、夜となく晝となく、ただ遊び樂しんで、いつかう政治に力を入れようとはし

道長が榮華をきはめた

なかつた。

藤原氏は、道長の時になつて最も榮華をきはめた。道長は、時平の弟の忠平の子孫で、第六十六代一條、第六十七代三條、第六十八代後一條三天皇の御代にわたり、三十年餘りの間、朝廷にお仕へして、大いに勢を振るつてゐた。さうして、その女は三人まで皇后となり、その御腹の皇子は、三人まで引きつゞいて御位にお即きになつた。取



藤原氏の

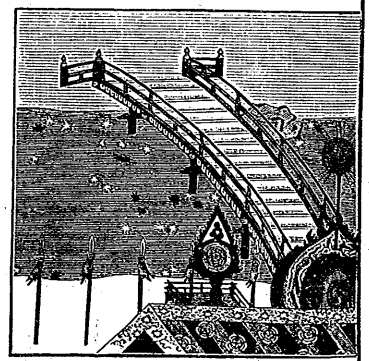
道長父子の專横

分け、後一條天皇の御代に、道長が攝政となり、その女がまもなく皇后に立たれた時には、道長はよろこびのあまり、

このよをば
わがよとぞ思ふ、もち月の
かけたることもなしと思へば。

といふ歌をよんで、自分の望が皆かなつたのを、十五夜の滿月にくらべて、一門の榮華をほこつたのであつた。

かうして、道長は、その富は皇室にもまさり、たいそうおごつた生活をしてゐた。かねて道長は京都に法成寺を



遊樂

建てたが、これは奈良の東大寺にもおとらぬ大きな寺であつた。その時、わがまゝにも公卿たちにいひつけて、宮中や諸官省などにある石を取つて建築場に運ばせた。ところが、工事がまだ出來上らないうちに、道長が病にかゝつたので、その子の頼通は命令を出して、朝廷の事は後まはしにしても、法成寺の御用は決して怠らないやうに」といひつけた。それ故、公卿たちは、われ先にと、日々大勢の工夫をやつて手傳はせ、國々の役人は、朝廷にさし上げるものはさしおいても、まづこの寺の材木や瓦などをさし出した。ために、工事は思ひのほか早く出來上つた。そこで、道長はしばらくこゝに移り住んで

ゐたが、まもなくなくなつた。

このやうに、道長父子は、つねに朝廷を恐れないで、わがまゝなふるまひが多かつたが、頼通やその弟の教通も、つゞいて攝政や關白となり、專横はますく つのるばかりであつた。

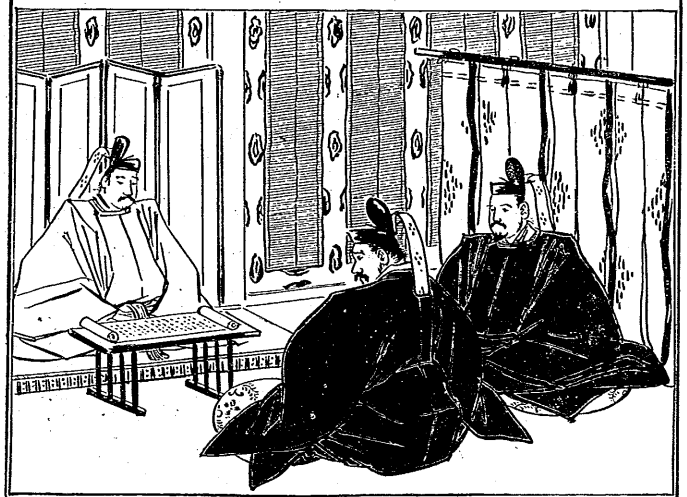
藤原忠平―師輔―兼家―道長―頼通……忠實―忠通
　　└教通　　└頼長

第十五　後三條天皇

藤原氏が衰へはじめた

藤原氏の勢が最も盛であつたのは、道長と頼通との代であつたが、第七十一代後三條天皇が御位にお即きになつてからは、その勢はしだいに衰へはじめた。

關白頼通が天皇をお恐れ申した



後三條天皇が學問におはげみになつた

後三條天皇は（第七十代）後冷泉天皇の御弟で、御年十二で東宮にお立ちになつた。それから二十年餘りも東宮でいらつしやる間に、大江匡房を師として一心に學問におはげみになり、内外の歴史にあかるくおなりになつた上に、取分け、御生

關白教通がわがまゝをつゝしむやうになつた

まれつきが嚴格でいらつしやつた。それ故、わがまゝな頼通も、かねぐ天皇をお恐れ申してゐたので、天皇が御即位なさる前に、關白をやめて宇治に隱居した。

頼通に代つて關白となつた弟の教通も、また勢にまかせて、天皇の御心にそむくことがたびくであつた。ある時、天皇にお願ひ申しあげたことを御許がなかつたので、たゞちに一族の公卿をひきつれて朝廷を退出しようとした。そこで天皇は、やむを得ず、その願をお許しになつた。教通は、かやうにして、一度は自分の思ひ通りにおし通すことが出來た。けれども、これから後は、天皇をお恐れ申して、わがまゝな行をつゝしむやうになつ

天皇が政治におはげみになつた

た。

天皇は、藤原氏の勢をおさへて政治におはげみになつた。おそれ多くも、日々の御膳部をはじめ、すべてに御儉約なさつて模範をお示しになり、官吏などが、大きな別莊などを作つておごりにふけるのをお戒めになつた。ある時など、石清水八幡宮へ行幸をなさると、拜觀者の車にかざりの金物がうつてあるのを御らんになり、わざわざ御輿をとめさせて、皆これをお取らせになつたことがあつた。かうして、久しくみだれてゐた政治もしぜんにとゝのつて、人々の心もたいそう引きしまつてきた。けれども、天皇は、御位にいらつしやること、わづか

頼通が天皇をお惜しみ申した

院政の始

に五年で、皇位を御子の第七十二代白河天皇にお讓りになり、まもなくおかくれになつた。この時、御年はまだ四十でいらつしやつた。宇治にゐた前の關白頼通は、このことを聞いた時は、ちやうど食事をしてゐたが、驚きのあまり、思はず箸をおとし、「どうしてかうも早くおかくれなさつたのであらう。御國のためにこの上もない不幸なことだ。」となげいて、お惜しみ申しあげたといふことである。

白河天皇もまた御父の御志をお受けつぎになり、決して政治を藤原氏におまかせにならなかつた。さうして、御位をお讓りなさつた後も、なほ院においでになつて、

政治をおとりになつたので、さすがに盛であつた藤原氏の勢も、ますく衰へるやうになつた。

武士がおこつてきた

第十六　源義家

藤原氏が衰へていく間に、武士はしだいに勢を増してきた。さきに、藤原氏が榮えて、その一門のみが高い官職についたから、どんなに才能がすぐれてゐた人でも、京都では思ふやうな立身が出來なかつた。そこで、たいてい地方の官吏となつて諸國に下り、藤原氏が地方の政治をかへりみない間に、そのまゝそこにとゞまつて、武士となるものが多かつた。中でも、源氏は第五十六代清和天皇

清和源氏

から出て、早くから勢が強く、代々てがらをたてて武名をあげたが、義家の時になつて、いつそうその名があらはれた。

頼義が義家と共に安倍氏を討つた

源義家は頼義の長男で、八幡太郎ととなへた。後冷泉天皇の御代に、安倍頼時といふものが陸奥にゐて、たくさんの土地をかすめ取り、人民を從へてそむいたので、朝廷では、頼義にいひつけて、これを討たせられた。頼義は、義家と共に陸奥に行つて頼時と戰ひ、とうく これを平げた。けれども、頼時の子貞任や宗任らは、なほ勢が強くて、なかく 降參しなかつた。そこで、頼義は進んでこれと戰つたが、折からの寒さに、雪さへ降つて、行軍がか

義家の武勇

なり、難儀な上に、兵糧が足らないため、人も馬も疲れはてて、さん〳〵にうち破られた。この時、義家は年やうやく十七であつたが、すぐれた勇士で、取分け、弓が上手であつたから、すぐ馬を飛ばして、たちどころに大勢の敵を射殺した。しかも、味方は頼義父子をはじめ、主従わづかに七騎となつたが、切りまくり切りまくつて、やつと敵の圍をのがれることが出來た。

頼義が安倍氏をほろぼした

かうして賊の勢がいよ〳〵強くなつてきたので、頼義は、出羽の人清原武則に助をたのんだ。武則は、すぐ兵をひきゐて助けに來た。頼義は、これに力を得て進軍し、いたるところで賊を破つて衣川の館に攻寄せたから、さ

義家のなさけ

すがの貞任も、館をすてて逃出した。義家は、これを見て、射殺さうと追ひつめ、「衣のたてはほころびにけり」とよみかけると、貞任は、すぐふりむいて、「年をへし糸のみだれの苦しさに」と答へた。そこで、義家は大いに感心して、弓につがへてゐた矢をはづして、そのまゝ貞任を逃がしてやつたといふことである。かやうな行は、實に武士のなさけといふべきであらう。それから、なほも進んで、貞任らを厨川の城に圍んだが、賊は城の中に高い櫓をかまへて、その上から官軍をねらひうちにした。官軍は、そのためにたいそう苦しんだ。その時、頼義は兵士にいひつけて、人家をこはして堀をうめさせ、また、たくさん

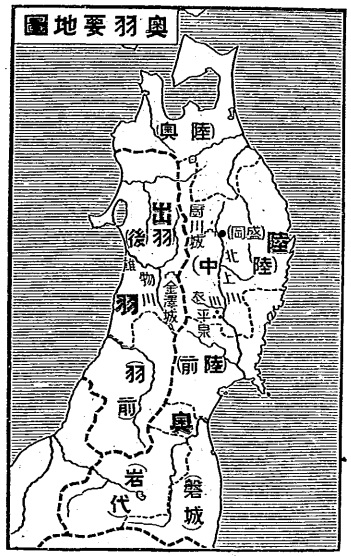
前九年の役

義家が兵法を學んだ

草を刈つて河岸に山のやうに積みあげさせ、自分は馬からおりて、はるかに京都の皇居ををがみ、心をこめて石清水八幡宮にお祈りして、火をこゝに投げこんだ。ところが、大風がにはかに吹きおこつて、火は見る〳〵うちに城の中にもえうつつた。賊軍は思ひもよらぬことだつたので、上を下へと、たちさわいでゐた。頼義は、こゝぞとばかりに攻寄せて、とう〳〵貞任らを斬り殺し、宗任らを生捕にして、この亂をすつかりしづめた。この戰を前九年の役といふのである。後に、頼義は、鎌倉に八幡宮を建てて、神恩にあつく御禮を申し述べた。

義家は、京都に歸つた後、關白頼通の邸に行つて、この戰

奥羽地方がまたみだれた



の物語をしてゐた。それを、大江匡房が、ふと、たち聞いて、「義家は、大將になれるすぐれた才能は持つてゐるが、惜しいことに、まだ兵法を知らない。」と、ひとりごとをいつた。義家の家來がこれを聞いて、たいへん腹を立て、かくと義家に告げたが、義家は少しも怒らず、かへつて、「もつとものことだ。」といつて、まもなく匡房を師として兵法を學んだ。

さて奥羽の地方では、さきに清原武則が頼義に味方し

義家が野に伏兵のゐるのをさとつた

て安倍氏の亂を平げてからは、その一族が安倍氏に代つて勢を得たのであつたが、白河天皇の御代になると、その子孫の間に爭が起つて、奥羽地方はふたたびみだれた。

義家は、陸奥守となつて、この亂をしづめようとしたが、武則の子の武衡らは、金澤にたてこもつて義家にてむかつた。ある時、義家は、これを攻めようとて進軍する途中、はるかに雁が列をみだしてゐるのを見た。さうして、すぐ、兵法に「野に伏兵がある時は、その上を飛ぶ雁は、必ず列をみだすものである。」と教へてあることを思ひ出し、兵をやつてさがさせると、案のぢやう伏兵がゐたので、すぐさまこれをみな殺しにした。後で、義家は、部下のものに「もし兵法を學んでゐなかつたら、きつと危い目にあつてゐたにちがひない。」と語つた。

弟義光が助けに來た

この頃、義家の弟の新羅三郎義光

源義家が弟義光と陣中で會つた

剛臆の席を分けて兵士をはげました

は、兄の身の上を氣づかつて、官をやめて、はる〴〵京都から下つて來た。義家は、弟の眞心に感激の涙を流しながら、「よく來てくれた。お前を見ると、まるで亡き父上に會つたやうな氣がする。」といつて、たいへんよろこんだ。これから、二人は力を合はせて攻戰つたが、敵もなかなかよく防いで、長い間降參しなかつた。

そこで、義家は、兵士の心をはげまさうと考へ、毎日兵士の戰ひ振を見てゐて、剛のものと臆病ものとの席を分け、戰がすんだ後、それ〴〵の席に着かせることにした。そのため、誰でも剛のものの席に着かうと心がけて、皆いさんで戰つた。鎌倉權五郎景正が、わづかに十六歲の

奥羽を平げた

後三年の役

少年の身でありながら、はな〴〵しく戰つて、後の世まで武勇のほまれをあげたのも、實にこの時のことであつた。

かうして年月がたつにつれて、武衡らは、兵糧が不足して、その勢もだん〴〵衰へたので、とう〴〵城を燒いて逃出した。義家は、追つかけてこれを斬つた。これから、奥羽地方はすつかりしづまつた。この時は、ちやうど第七十三代堀河天皇の御代の初であつた。世にこの戰を後三年の役といつてゐる。戰がすんでから、義家は、戰功のあつたものに恩賞を與へられたいと、朝廷にお願ひしたけれども、御許がなかつたので、自分の財產を分けて、部下の

源氏の勢が東國で盛になつた

將士に與へた。それからは、義家はまます〳〵武士の間に重んぜられて、源氏の勢は、取分け、東國の地方で盛になつた。

清和天皇―貞純親王―源經基―滿仲―賴信―賴義―義家―義親―爲義―義朝―義平
賴義―義光
爲義―爲朝

第十七　平氏の勃興

桓武平氏

源氏と並んで名高い武士は、平氏である。平氏は桓武天皇から出て、その勢は、一時、源氏におとつてゐたが、平忠盛の子、清盛が出てから、大いに家名をあらはすやうになつた。

藤原賴長が崇德上皇に

この頃、藤原氏の一門に權力の爭があつた。左大臣藤原

おすゝめして兵を擧げた

賴長は、まへ〳〵から兄の關白忠通に代らうと望んでゐたため、兄弟仲がよくなかつた。ちやうど、第七十代後白河天皇の保元元年に、賴長は、天皇の御兄崇德上皇の御子重仁親王を御位にお迎へして、自分が關白とならうと考へ、上皇におすゝめして兵を擧げようとし、義家の孫源爲義を味方に呼寄せた。すると、爲義はその子爲朝らをひきゐて上皇の御所にまゐつたが、爲義の長子義朝は、平清盛らと共に、天皇のお呼びだしを受け、皇居にまゐつてお味方申しあげた。

爲朝の武勇

爲朝は、爲義の八男で、體格は人なみすぐれて大きく、身のたけ七尺ばかりもあり、しかも力が強くて、弓がたい

へん上手であつた。十三歳の時、九州に下つて、みづから鎭西八郎ととなへ、大勢の部下をひきゐて、わづか三年の間に九州をうち從へようとしたほどの剛のものであつた。後に京都に歸つたのであるが、父に從つて上皇の御所にまゐつた時は、十八歳であつた。

爲朝らがまけた

賴長は、爲朝を呼んで、軍の謀をたづねた。爲朝は、卽座に、「私は長い間九州にゐて、二十度餘りも合戰をしましたが、勝戰はいつも夜討にかぎつてゐました。それ故、今夜すぐ皇居におし寄せ、三方から火をつけて、一方から攻めたてたなら、きつと勝つにちがひありません。勇氣のある敵は兄義朝だけですが、それとて、私の矢一筋でた

ふせます。まして、清盛らのへろ〳〵矢ぐらゐ何でもありません。」と、きつぱり答へて夜討をすゝめたが、賴長はこれを用ひようとはしなかつた。ところが、義朝や清盛らが、早くも夜に乘じて攻寄せて來て、火を風上にはなつたので、味方の軍はたちまち苦戰におちいり、賴長は矢にあたつてたふれた。爲朝らは、勇を振るつて精いつぱい防ぎ戰つたが、とう〳〵敗れて、おそれ多くも上皇は讃岐におうつされになり、爲義は斬られ、爲朝は伊豆の大島に流された。世にこれを保元の亂といふのである。

保元の亂

平清盛の勢が增してきた

亂がをさまつた後、清盛や義朝は、それ〴〵そのてがら

を賞せられたが、中でも清盛は、その頃勢力のあつた藤原通憲と親しくして、ますゝ勢を増したので、義朝は心ひそかに不平に思つてゐた。たまゝ第七十八代二條天皇の御代、藤原信頼といふものが、後白河上皇にお願ひして、高い官を得ようとしたが、通憲にさまたげられたので、深く通憲をうらみ、ひそかに義朝と合體して、これを殺さうとたくらんでゐた。

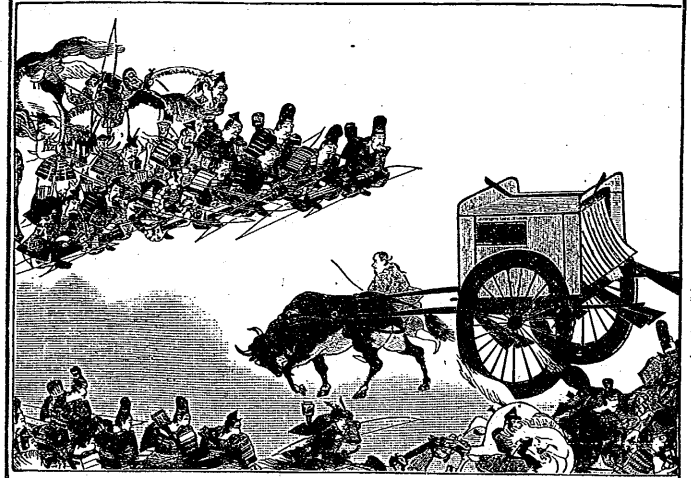
藤原信頼が義朝と合體した

平治元年、清盛は、子重盛らと、熊野の神社に參詣するため、京都を立つた。

義朝信頼がむほんをおこした

二條天皇

そこで、義朝・信頼は、清盛の不在につけこんで、にはかに兵を擧げて、通憲を討たうとした。通憲は、早くも身の危いのをさとつて、京都を逃出したが、途中で捕らはれて斬られた。この間に、義朝らは、おそれ多くも、上皇の御所を燒き、上皇と天皇とを皇居におしこめ申



が平清盛の邸に行幸をなさつた

清盛の軍が義朝らを破つた

した。

清盛は、途中でこのさわぎを聞くと、重盛にすゝめられて、急いで京都に引きかへした。さうして、ひそかに天皇を自分の邸にお迎へ申しあげたが、上皇もまた皇居をお逃出しになつた。天皇は清盛におほせつけて、義朝をお討たせになつた。義朝らは皇居にたてこもり、白旗を幾筋もく〳〵うち立てて、勢盛に清盛の軍を待ちうけてゐた。清盛はすぐ重盛らをやつてこれを攻めさせたが、平家の赤旗は折からの朝風にひらめいて、實に勇ましい進軍であつた。この時、重盛は「年號は平治で、土地は平安、その上われらは平氏である。この敵はきつと平ぐに

重盛義平の決戰

ちがひない」といつて、大いに兵士をはげました。重盛が敵を破つて皇居に攻入り、紫宸殿の前に來た時、義朝の長子義平は、馬を走らせて迎へ戰ひ、左近櫻や右近橘をめぐつて勢するどく追ひかけた。重盛はかなはないで引退いた。義朝は、平氏の軍が逃出したのを見て、たゞちに兵をひきゐて追つかけたが、かへつて敗れ、退かうとする時には、皇居ははや平氏の軍に占領せられてゐた。義朝は、そこで、東國に走らうとしたが、途中、尾張の國で家來に殺された。また信頼や義平らも捕らはれて斬られた。世にこれを平治の亂といふのである。

平治の亂

桓武天皇―葛原親王―高見王―平高望―國香―貞盛……忠盛―清盛―重盛―維盛
　　└良將―將門　　└宗盛
　　└經盛―敦盛

第十八　平重盛

源氏が衰へ平氏が盛になつた

保元・平治の二度の亂によつて、長い間勢があつた源氏はすつかり衰へ、これにひきかへ、平氏はしだいに盛になつた。

平氏が全盛をきはめた

亂がをさまつて後、清盛の勢は日毎に加り、官や位もしきりに進み、平治の亂の後まだ十年もたゝないうちに、早くも太政大臣に任ぜられた。まもなく、これをやめて出家したので、人々から太政入道と呼ばれた。その一族

もそれ〴〵高い官位にのぼり、一門の領地は三十國餘りにもわたつて、はては藤原氏にもまさるほど繁昌し、「平氏でないものは、人でない」と、じまんするものさへあるやうになつた。

清盛のわがまゝ

清盛は、勢の盛なのにまかせて、だん〴〵わがまゝなふるまひが多くなつた。後白河上皇はこれをおさへようとお考へになつたが、御心のやうにならなかつたので、とう〴〵御髪をそつて法皇におなりになつた。そこで、法皇の近臣たちの中で、この有様をなげく人々は、僧俊寛の鹿谷の別荘により集つて、ひそかに平氏をほろぼさうと相談してゐた。清盛は、これを知つて大いに怒り、

重盛が父を諫めた

その人々を捕らへて、すぐ斬り殺さうとした。重盛は、おとなしくて、しかも忠孝の心の深い人であるから、「私の怨で役人を殺すのはよくありません。殊に、わが家は、今が最も勢の盛な時ですから、なほさら善い行をして、子孫が榮えるやうにしていたゞかねばなりません。たとひお氣に入らないことがあつても、決してわがまゝなことをなさらないで、どうか子孫のためと思はれて、がまんしていたゞきたいものです。」と、涙を流して父を諫めた。

清盛の不忠

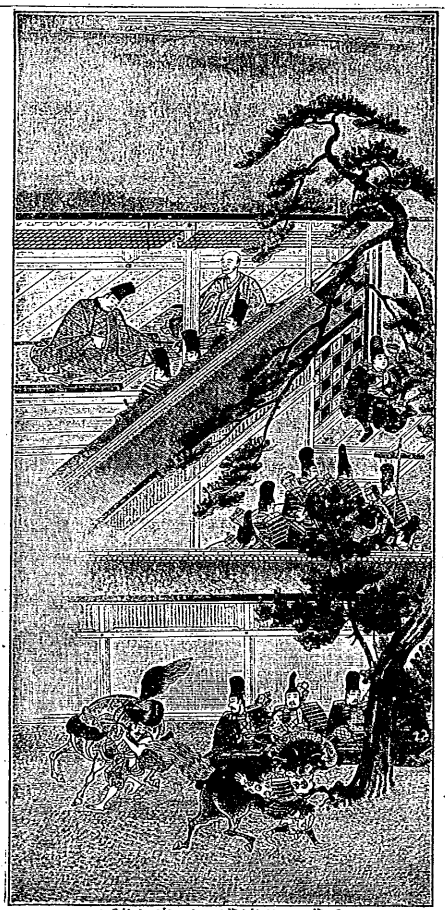
けれども、清盛の立腹はなほやまず、おそれ多くも法皇をもおしこめ申さうとして、一族を呼寄せたので、人々

また重盛が父を諫めた

は皆武裝してその邸に集つた。ところが、重盛ひとりは、ふだんの裝束のまゝで、おくれて來た。弟の宗盛がこれを見て、そつと袖をひいて、「これほどの大事な場合に、なぜ武裝をなさらないのですか。父上も早くから鎧を着てゐられますぞ。」と注意した。すると、重盛は、「大事とは何事か。いつたい朝敵はどこにゐるのか。自分は近衛大將であるから、朝廷の大事でないかぎり、めつたに武裝は出來ない。」と、きつく戒めた。清盛はこれを聞いて恥づかしく思つたが、今更鎧をぬぐ暇もないので、急いで法衣を引つかけて重盛に會ひ、わざとおちついた振りをしてゐた。けれども、鎧の金物は、襟の間からちら〳〵と見

えてゐた。重盛は、はら〳〵と涙を流しながら、恩を知つてこそ人といへるので、知らないものは、鳥やけだものと同じです。恩の中でも、一ばん重いのは君の御恩です。まして、わが家は桓武天皇の御末でありながら、中頃たいへん衰へてゐたところ、父上になつて大いに立身出世せられ、われ〳〵のやうなおろかなものまでも高い官位をいたゞいてゐるのは、これ全く君の御恩ではありませんか。今、この御恩を忘れて、天皇の御威光をかろんじ申すやうなことがあつては、たちまち神罰を受けて、一族はやがてほろびてしまふでせう。それでも、なほ、父上がお聞入れなさらないなら、私は、兵をひきゐて法

皇をお守りせねばなりません。しかしまた、父上にてむかふことも、子として私には堪へられません。それ故、父上がどうしてもこの企を成しとげようとなさるなら、



平重盛が父清盛の不忠を諫めた

まづ私の首をはねてからにして下さい。」と、眞心こめて諫めたので、さすがの清盛も、しばらくは、思ひとゞまるやうになつた。重盛のやうな人こそ、まことに忠孝の道を全うしたりつぱな人といふべきである。

重盛は忠孝の道を全うした

第十九　武家政治の起

清盛がわがまゝをきはめた

平重盛は、日頃、父清盛のわがまゝを心配してゐたが、不幸にも重い病にかゝり、父にさきだつてなくなつた。それからは、清盛は誰はゞかるところなく、ますゝわがまゝなふるまひをし、おそれ多くも後白河法皇をおしこめ申すやうなことをした。源頼政は、この有様を見て

源頼政が兵を擧げた

大いになげき、どうかして平氏をほろぼして法皇をおすくひ申しあげたいと考へた。そこで、法皇の御子以仁王をいたゞいて兵を擧げようとはかり、王のいひつけを國々の源氏に傳へた。ところが、兵士がまだ集らないうちに、頼政は宇治の戰にまけて自殺し、王も矢にあたつてなくなられた。けれども、これから源頼朝をはじめ、國々にかくれてゐた源氏は、王のいひつけに從つて、一度に奮ひたつた。

源頼朝が兵を起した

頼朝は義朝の子である。平治の亂の後、十四歲の時伊豆に流されてから、二十年餘りの長い間、その地の豪族北條時政の世話になつて、しづかに回復の時期を待つて

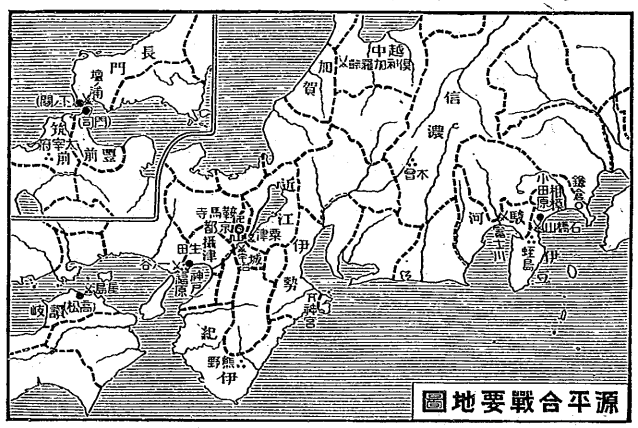
富士川の對陣

ゐた。そこへ、以仁王からのいひつけを受けたので、時政らと共にまつさきに兵を起した。東國には、かねてから源氏に味方する武士が多かつたので、頼朝はそれらの人々を從へて、早くもその地方を平げ、つひに鎌倉を根據とした。

清盛は大いに驚いて、すぐ、孫の維盛をやつて頼朝を討たせた。頼朝は、大兵をひきゐて駿河に進み、平氏の軍と富士川をはさんで陣を取つた。ある夜、源氏の一隊がこつそり平氏の軍の後へ廻らうとしたところ、あたりの沼にゐたたくさんの水鳥が、びつくりして一度にぱつと飛立つた。平氏の軍は、その羽音に、敵兵が大勢攻寄せて來たものと思ひこみ、弓矢を投げすてて逃げかへつた。

源義經がたづねて來た

けれども、頼朝はこれを追つかけないで、なほこの上とも東國を固めておかうと考へ、兵士をまとめて鎌倉に引きかへさうとした。ちやうどこの時、弟の義經が、はるぐ奥州から頼朝をたづねて來た。もとく義經は、平治の亂の後、幼い身で鞍馬寺にあづけ



源平合戰要地圖

られたが、ある日、寺でわが家の系圖を見て、はじめてりつぱな家柄であることを知り、いつかは平氏をほろぼさうと考へ、これから奮發して學問や武藝にはげんだ。その後、十六歳の時、奥州の平泉に下つて、その地方の豪族藤原秀衡の家にかくれてゐた。それが、今や頼朝が兵を起したと聞いて、兄を助けるため急いで上つて來たのであつた。頼朝は、義經に會つてたいへんよろこび、先祖の義家と義光が兄弟對面の昔話をして、弟の手を取つてうれし泣きに泣いたといふことである。

源義仲が兵を起した

頼朝の從弟義仲は、さきに二歳の時父に死別れてから、信濃の木曾山中で育つたのであるが、頼朝と同時に、兵

を起した。さうして、信濃から北國に攻入つて、越中の倶利加羅谷で、維盛の大軍をさん〳〵にうち破り、ひといきに京都へ攻上つた。この時、清盛ははや病死してゐたので、その子の宗盛が、一族と共に、第八十一代安徳天皇をいただいて西國へおちて行つた。

平氏の都おち

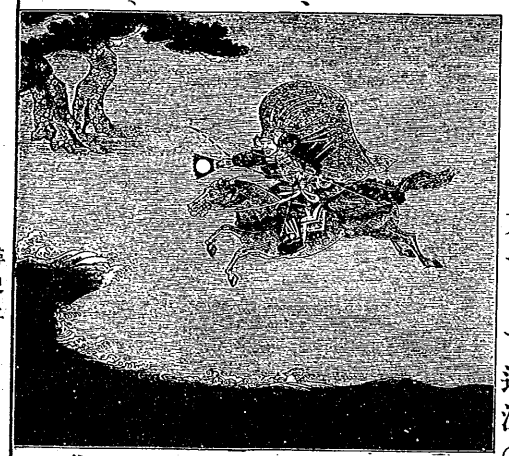
それに入れ代つて、義仲は京都に入り、後白河法皇から平氏を討てとのおほせを受けた。けれども、勢にまかせて亂暴な行が多く、しまひには法皇にそむいて、その御所を襲ふやうなことまでした。そこで、頼朝は、弟の範頼・義經を京都にやつて、これを討たせた。この時、佐々木高綱と梶原景季とは、めい〳〵頼朝からいたゞいた名馬

義仲がそむいて殺された

にうち乘つて、宇治川の先陣を爭つたが、高綱がまづ第一ばんに渡り着き、大勢の兵士がこれにつゞいて、大いに義仲の軍を破つた。義仲は、とうく力つきて近江の粟津でうち死した。

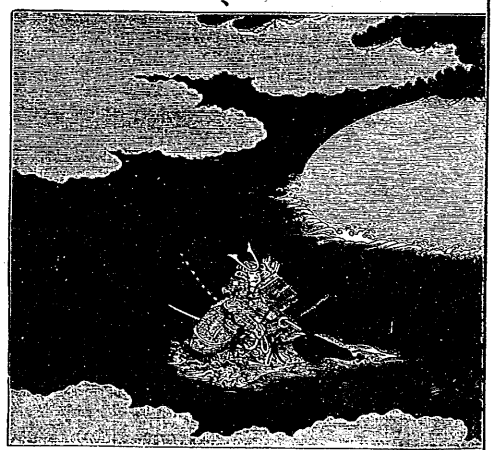
一谷の戰

かうしてゐる間に、平氏はふたたび勢をもりかへして、京都を取りもどさうと、攝津の福原に引きかへしてきた。そこで、賴朝は、さらに範賴義經にいひつけて、これを討たせた。二人は道



一谷

を分けて進み、範賴は生田森から、義經は一谷から、それぞれ福原に向つたが、義經が鵯越から敵の後に出て、不意に攻めたてたので、平氏の軍はたちまち敗北し、宗盛は、天皇をいたゞいて、讃岐の屋島に逃げた。時に、平敦盛は、たゞ一人舟に乘りおくれたので、馬に乘つたまゝ海にかけ入り、味方の舟におよぎ着かうとしてゐた。すると、義經の部下の熊谷直實が、扇をあげて、これ



の戰

屋島の戰

を呼びかへした。敦盛は、少年ながら、をゝしくも、すぐ馬を引きかへして、直實と組打をしたが、力つきて首をうたれた。敦盛のやうな人こそ、まことにけなげな若武者といふべきであらう。

義經は、なほも、大風をものともせず、舟を出して四國に渡り、いち早く屋島の城に攻寄せて、これに火をつけた。ために、宗盛は、ふたたび天皇をいたゞいて、西へ走つた。この戰に、義經の部下の那須餘一は、あつぱれ扇のかなめを射て譽をあげ、また奥州から義經にお供をして來た勇士佐藤繼信は、義經の身代となり、敵の矢にあたつて、忠烈な戰死をとげた。

壇浦の海戰

平氏がほろびた

頼朝が義經を殺させた

義經は、また、逃げゆく平氏を、長門の壇浦に追ひつめて、こゝで最後の決戰をした。平氏の軍はとうくまけて、大將宗盛は、卑怯にも敵に捕らはれたが、その他の一族は皆戰死して、平氏はすつかりほろびてしまつた。この時、天皇は、やうやく八歳の御幼少でいらつしやつたが、清盛の妻二位尼にだかれて、海におはいりになつた。まことにおそれ多い御事である。

義經は、かやうに、頼朝のために、平氏をほろぼして非常なてがらをたてたが、頼朝は、かへつて義經をにくんで近寄せず、はては殺させようとさへした。そこで、義經は、ふたたび平泉にのがれ、秀衡にたよつてゐたが、秀衡の

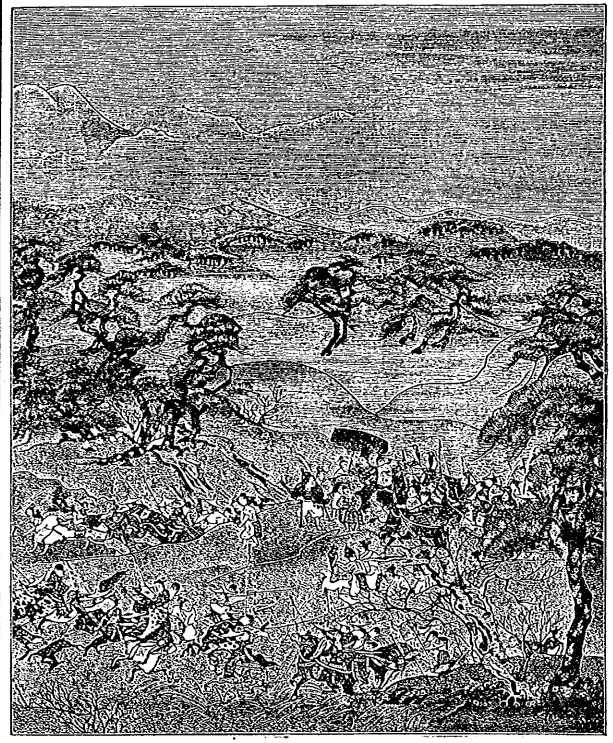
頼朝が奥州を平げた

死んだ後、その子の泰衡が、頼朝のいひつけに從つて義經を殺した。ところが、頼朝は、なほ泰衡が長い間義經をかくまつてゐたことを責めて、みづから大軍をひきゐて奥州を攻め、まもなく泰衡をもほろぼしてしまつた。

頼朝の政治

これから、國内は、全く頼朝の威勢になびき從つた。けれども、頼朝は、平氏の人々がおごつたために、わづかの間にほろびたことに考へ、あはせ、清盛らのやうに高い官位にのぼつて、京都の人々と交ることを避け、鎌倉にゐて質素な生活をし、部下のものにも大いに儉約をすゝめた。ある時など、部下のものが、十枚餘りの着物を着かざつて頼朝の前に出ると、頼朝は、すぐ刀を取つて、その

着物のつまを切り、おごりをきびしく戒めたことがあつた。また、いつも武藝をはげまし、富士の裾野をはじめ、所にたびたび



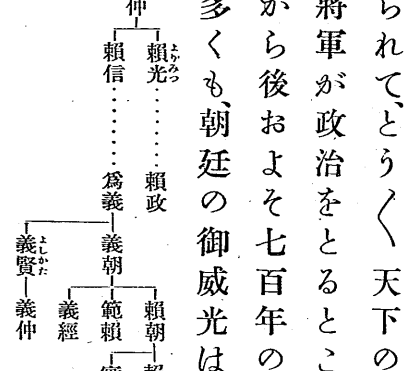
頼朝が富士の裾野で狩をもよほしたし

頼朝が幕府を開いた

征夷大將軍

武家政治の始

狩をもよほしたりして、武士の勇氣を養ふことに力をいれた。かやうにして、鎌倉の勢はいよ〳〵強くなり、紀元一千八百五十二年(建久三年)に、頼朝は征夷大將軍に任ぜられて、とう〳〵天下の政治をとり行ふこととなつた。將軍が政治をとるところを、幕府といふのである。これから後およそ七百年の間、武家の政治がつゞき、おそれ多くも、朝廷の御威光は、いよ〳〵衰へられた。



後鳥羽上皇が長い間政治をおとりになつた。

源氏がほろび北條氏の世となつた

第二十　後鳥羽上皇

安德天皇の御後は、第八十二代後鳥羽天皇が御位にお卽きになつたが、天皇は、御位をお讓りなさつてからも、上皇として長い間政治をおとりになつた。その間に、御子の第八十三代土御門天皇、第八十四代順德天皇や、御孫の第八十五代仲恭天皇が、つぎ〳〵にお立ちになつた。

その頃、源頼朝は、すつかり國内の武士を從へて、勢が盛であつたが、もと〳〵疑深い性質で、とかく一族のものと仲がわるく、義經をほろぼした後は、また範頼をも疑つて殺させてしまつたので、源氏の勢は、しぜんと衰へていつた。ところが、頼朝の舅の北條時政は、頼朝がはじ

めて兵を起した時から、これを助けて大いにはたらき、後には幕府の政治にもあづかつたので、その勢はたいへん強くなつた。それで、賴朝がなくなつた後、長子の賴家が將軍となると、まもなく時政のためにやめさせられて、賴家の弟實朝が職をついだ。賴家の子の僧公曉は、實朝を深く怨んで、實朝が鶴岡八幡宮に參詣した時、ひそかにうかゞひ寄つて、これを刺し殺した。さうして、公曉もまた、時政の子義時に殺された。これで、賴朝の子孫は全く絶えてしまつた。そこで、義時は、京都から賴朝の血筋を少しばかりひいてゐる幼主を迎へ、自分がその執權となつて幕府の實權を握り、思ふ存分にふるまふ

後鳥羽上皇が北條氏をおさへたにつた

やうになつた。

後鳥羽上皇は、御生まれつき嚴格な御方で、いつも日課をきめて、いろ〳〵の御事をつぎ〳〵に行はせられ、たとひ風が吹かうと雨が降らうと、決してこれをおとりやめなさるやうなことはなかつた。すべてに、このやうな御性質でいらつしやつたから、上皇は、かねぐ、幕府が勝手きまゝに天下の政治を行ふことをお怒りになつて、折さへあれば、政權を朝廷に取りもどさうとお考へになつてゐた。たま〳〵賴朝の子孫が絶えても、幕府の政治はもとのまゝである上に、義時はたび〳〵上皇のおほせにそむいたので、上皇は、仲恭天皇の承久三年

承久の變

北條義時の不忠

に、いよ〳〵國々の武士を呼寄せて、義時をお討たせになることとなつた。

義時は、これを聞くとたいそう驚き、子の泰時らにいひつけて、大軍をひきゐて京都に上らせた。泰時らは、官軍を尾張・美濃・近江などの各地で破り、勢にまかせて京都に攻入つた。さうして、義時は、たゞちに、上皇にお味方申した人々を斬つたり流したりした。その上、おそれ多くも、後鳥羽上皇を隱岐に、順德上皇を佐渡に、土御門上皇を土佐におうつし申しあげ、また仲恭天皇を廢して、第八十六代後堀河天皇をお立て申した。世にこれを承久の變といつてゐる。天皇の御心にそむいて、みだりに兵を擧げて京都をさわがし、しかも、天皇を廢立申したり、三上皇を遠い島々におうつし申したりしたことは、古今に例のない大事變で、義時の不忠不義、まことににくみてもあまりありといふべきである。

六波羅府

隱岐の御所

かやうにして、後鳥羽上皇の御志もむだとなり、この後、北條氏は、一族のものをかはる〳〵京都の六波羅に置いて、畿内や西國の政治を行はせ、その勢は、ます〳〵盛になるばかりであつた。その間、三上皇は、はるかに都の空をおしたひなされつゝ、つらい年月を遠い島々でお過しになつて、そのまゝおかくれになつた。取分け、後鳥羽上皇の隱岐の御所は、やつと雨風をおしのぎになれ

隱岐の御所

るくらゐの假屋であつたので、しほ風のはげしく吹いてゐた時、

われこそは
新島守よ、
おきの海の
あらきなみ風
こゝろして吹け。

とおよみになつた。上皇は、十九年の長い間こゝにいらつしやつて、とう

とう御年六十でおかくれになつた。これを佐渡の島で傳へ聞かせられた順德上皇は、あけくれ御涙にくれておいでになつたが、三年の後には、御みづから御食事を斷つて、おかくれになつた。まことにく、申しあげやうもないおそれ多い御事である。

北條時政―┬政子（頼朝の妻）
　義時―泰時―時氏―時頼―時宗―貞時―高時

第二十一　北條時宗

時宗の勇氣

北條義時は、不忠の行が多かつたが、時宗の代になると、たまく、建國このかた例のない外國の寇があり、時宗は非常な覺悟でこれにあたつたため、大いにわが國の

威力をあげることが出來た。時宗は時賴の子で、相模太郎といつた。豪氣な生まれつきで、弓が上手であつた。ある時、將軍が、武人を呼寄せて弓を射させた。人々は、皆射そこなひはしないかとためらつてゐたが、わづかに十一歳の時宗は、少しも氣おくれするやうなことなく、馬に乘つて進み出で、たゞの一矢でみごとに的に射あてて、大いに譽をあげたことがあつた。第九十代亀山天皇の御代に、時宗は十八歳で執權となり、幕府の政治を行ふやうになつた。

蒙古がおこつてきた

これより前、支那の北の方に蒙古といふ國がおこり、しきりにあたりの國々を攻取つて、西は今のロシヤの西

南部から、東は朝鮮半島にまで勢をのばしてきた。時に、半島では、新羅はすでにほろびて、高麗がこれに代つてゐた。

時宗が蒙古の使を追ひかへした

蒙古王は、早くも高麗を從へ、なほもわが國を從へようとして、高麗王にいひつけて無禮な手紙を送らせてきた。時宗は、これを見ると大いに怒つて、その使を追ひかへしてしまつた。

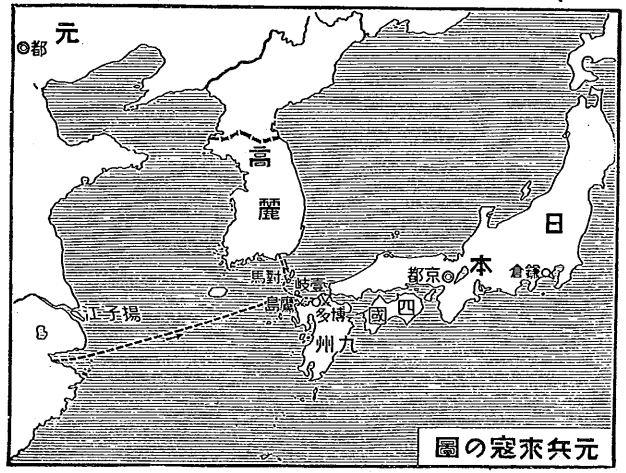
文永の役

その後、まもなく、蒙古は支那の大部分を攻取つて、國の名を元ととなへた。第九十代後宇多天皇の文永十一年に、元は、高麗の軍を合はせ、四萬の大軍で、對馬や壹岐に寇し、たちまち筑前におし寄せて、博多附近に上陸した。わが

時宗の決心

將士は、少しも恐れず、死にものぐるひになつて戰ひ、よく防いだので、元の軍はとう〳〵逃去つた。世にこれを文永の役といふのである。

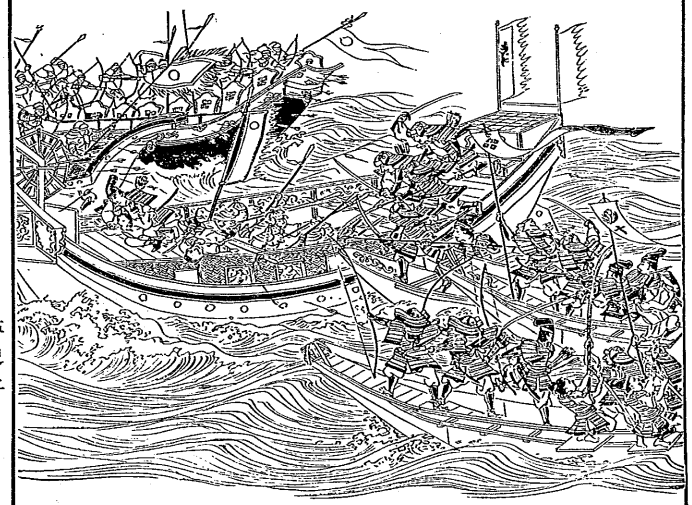
けれども、元の勢はますます強くなつて、また使をわが國に送つてきた。ところが、時宗の決心はいよ〳〵堅く、家來にいひつけて、その使を斬り殺させた。その上、博多灣の海岸に石壘を築き、敵軍が攻めてくれば、いつでも迎へうてるやうに用意をさせた。



弘安の役

かうしてゐるうちに、元はすつかり支那を從へ、その勢で、弘安四年に、四萬の兵を朝鮮半島からふたたび筑前にさし向け、別に支那からは十萬の大兵を出した。朝鮮半島から來た敵兵は、壹岐ををかして博多に攻寄せて來たが、菊池武房や河野通有・竹崎季長らの勇士は、石壘にたてこもつて防いだり、勇敢にも敵艦へ斬りこんだりして、大いにこれを苦しめた。そのうち、支那から來た大軍が、これといつしよになつて、今にも攻寄せて來よ

うとした。その時、にはかに神風が吹きおこつて、敵艦の大部分は沈沒し、溺れて死ぬものは數へきれないくらゐであつた。多くの大將らは、われ先にと逃去り、取殘された兵士は、肥前の鷹島に集つたが、それも殺されたり、捕らへられたり



弘安の役

上下が心を合はせて元寇をうちはらつた

して、その軍は全くほろびてしまつた。世にこれを弘安の役といふのである。

この元寇は、實にわが國はじめての大難であつた。それ故、龜山上皇は、たいそう御心配になり、おそれ多くも、たふとい御身を以て國難にお代りなさらうと、伊勢の神宮にお祈りになつた。また、時宗は、非常な決心で事にあたり、國民は皆一體となつて奮ひおこり、上下よく心を合はせて、とうくこの強敵を追ひはらふことが出來たのである。これから後は、元は二度とわが國をうかゞふやうなことはなかつた。かたじけなくも第百二十二代明治天皇は、時宗の大功をお褒めになつて、特に從一位をお贈

りになつた。

第二十二　後醍醐天皇

天皇が政權を取りもどさうとなさつた

弘安の役から四十年ばかりたつて、第九十六代後醍醐天皇が御位にお即きになつた。天皇は、後宇多天皇の御子で、聰明な御生まれつきであらせられたから、お小さい時から、御祖父の龜山上皇にたいそうかはいがられていらつしやつた。また學者を召して、ひろく學問をお修めになり、政治に御心をお用ひになつて、早くから鎌倉幕府のわがまゝなふるまひをお怒りになつてゐたから、後鳥羽上皇の御志をついで、政權を朝廷に取りもどさうとお考へになつた。

北條高時

この頃、幕府では、北條時宗の孫の高時が政治を行つてゐたが、おろかな生まれつきで、晝となく夜となく宴會をもよほしたり、數千匹の犬を集めて、そのかみ合を見物したりして、少しも政治に力をいれなかつたため、たいへん人望を失つた。そこで、天皇は、かねてからの御志をしとげるのはこの時であると、ひそかに武士をお召しになつた。ところが、この事が、いつのまにか、鎌倉にも聞えたので、高時は大いに驚き、急に兵を京都へ上らせて來た。天皇は、これをお避けになつて、山城の笠置山に行幸をなさつた。

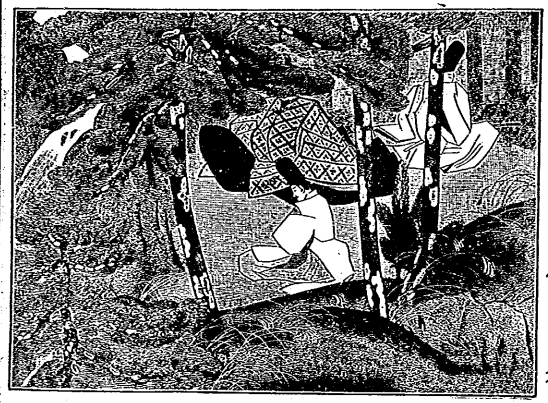
天皇が笠置山に行幸をなさつた

楠木正成が行在所にまゐつた

河内の國金剛山の麓に住んでゐた楠木正成は、天皇の御召によつて、まつさきに笠置の行在所にまゐつた。さうして、天皇に拜謁して、「賊軍がどんなに強くても、謀をめぐらせば、これをうち破ることは、さほどむづかしくはありません。けれども、勝敗は軍の習でありますから、たまには敗れることがあつても、決して御心配下さいますな。正成一人なほ生きてゐるとお聞きなさつてゐる間は、御運はいつかお開けになるものと、御心を安らかにしていらつしやるやうお願ひ申します」と、力強く申しあげた。それから、河内に歸つて赤坂に城を築き、天皇をお迎へ申さうとしたが、まもなく賊軍が笠置をお

天皇が隱岐におうつされになつた

としいれてしまつた。



笠置おち

天皇は、藤原藤房らを從へられ、御徒歩で笠置をおのがれになつたが、その途中の御難儀は、まことにおそれ多く、晝はかくれ、夜になると、あてもなくさまよはせられる御有樣であつた。お供の藤房らは、三日の間も、食事をしなかつたため、身も心もすつかり疲れはてて、しばらく木かげに休んでゐた。その時、こずゑ

の露がおちて、天皇の御衣をぬらしたので、天皇は、

さしてゆく笠置の山を出でしより、
あめが下にはかくれがもなし。

とおよみになつた。藤房は、もつたいなさに、涙をおさへながら、

いかにせん頼むかげとて立寄れば、
なほ袖ぬらす松のしたつゆ。

とお答へ申しあげた。まもなく、天皇は、賊兵に捕らはれて、隱岐の島におうつされになつた。

護良親王が吉野にたてこもられた

笠置が破れた後、賊軍は赤坂城を圍んで、とうくこれをおとしいれてしまつた。正成は、そこをのがれて、しばらくかくれてゐたが、ほどなく、ふたたび兵を集めて、城を金剛山の千早に築いた。天皇の御子護良親王もまた、吉野にたてこもつて、義兵を四方にお募りになつた。けれども、すぐ賊の大軍がおし寄せて來たので、吉野がまづおちいつた。この時、村上義光が親王の御鎧をいたゞき、これを着て、みづから親王といつはつて自害したので、親王はやつと危い難をおのがれになつた。一方、正成は、わづかの兵をひきゐて千早城にたてこもり、さまざまに謀をめぐらして、たびくし賊軍をなやました。この間に、國々では、親王の御命令を受けて、勤王の軍を起すものが多くなつた。

正成が千早城にたてこもつた

天皇が伯耆に渡つて名和長年をお召しになつた

足利尊氏らが六波羅をほろぼした

天皇は、この有様をお聞きになると、ひそかに隱岐から伯耆に渡つて、その地の豪族名和長年をお召しになつた。長年は、天皇のおほせを受けて大いに感激し、たゞちに一族を呼集めてこの事を傳へた。皆いづれも奮ひたつて、「この度、天皇のおほせをいたゞいたことは、この上もないわが家の名譽である。天皇の御ためには、たとひ屍を戰場にさらしても、名を後の世に殘さねばならない。急いでお迎へにまゐらう。」といつて、大急ぎで行宮を船上山に造り、こゝに天皇をお迎へして、兵を集めてお守り申しあげた。

そこで、天皇は、大勢の大將をやつて、六波羅を攻めさせられた。高時は、これを聞いて大いに驚き、足利尊氏らにいひつけて、急いで兵をひきゐて京都へ上らせた。ところが、尊氏は源義家の子孫であるから、かねゞ北條氏の下にゐることを不平に思つてゐた。それ故、この時にはかに朝廷に從ひ、勤王の人々と力を合はせて、賊軍を討ち、とうゝ六波羅をおとしいれた。よつて、天皇は、さつそく船上山をお出ましになり、京都へお向ひになつた。

新田義貞が鎌倉をおとしいれた

新田義貞もまた、義家の子孫である。さきに、賊軍に從つて千早城を攻めたが、まへゝから、朝廷にお味方しようと考へてゐた。そこで、ひそかに護良親王の御命令を

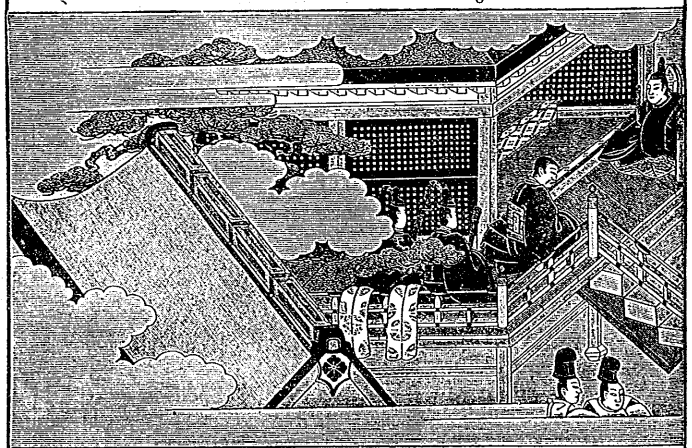
受けると、病といつはつて上野に歸り、義兵を起した。さうして、進んで鎌倉を攻め、稻村崎からうち入つて、高時らを破つて北條氏をほろぼした。賴朝以來百四十年餘りつゞいた鎌倉幕府は、こゝにほろびてしまつた。

天皇が京都におかへりになつた

船上山から京都へ向はせられた天皇が、兵庫にお着

楠木正成が後醍醐

きになつた時、義貞の使が來て、鎌倉を平げたことを申しあげた。正成も、また、部下をひきゐて兵庫に來た。天皇は、正成を御そば近くにお召しになつて、大いにそのてがらをお褒めになり、正成を前驅として京都におかへりになつた。時に紀元一千九百九十三年(元弘三年)であつた。これから、



天皇に拜謁したし

建武の中興

天皇は、御みづから天下の政治を行はせられることになつた。さうして、護良親王は、その御てがらによつて、征夷大將軍におなりになり、尊氏・義貞・正成・長年らも、皆それぞれあつく賞せられた。かうして、政權はふたたび昔のやうに朝廷にかへつた。この時、年號が建武と改つたので、世にこれを建武の中興といふのである。

源義家―義國―新田義重……朝氏―義貞―義顯
　　―足利義康……貞氏―尊氏―義詮―義滿
　　―直義

尊氏の野心

第二十三　楠木正成

鎌倉幕府が倒れて政權が朝廷にかへつてから、朝廷の

御威光はふたたび盛になつた。けれども、武士の中には、長い間幕府の政治になれてゐたため、君臣の大義を忘れ、朝廷の賞罰に不平をもち、かへつて武家の政治をよろこぶものが少くなかつた。足利尊氏は、かねぐ將軍になりたいと望んでゐたので、これら不平の武士を、ひそかに

京都附近の要地圖

護良親王が害されなさつた

手なづけてゐた。

護良親王は、早くも尊氏の野心をさとつて、これを除かうとせられたが、かへつて尊氏に讒言せられ、これがために鎌倉に送られておしこめられたまうた。この頃、尊氏の弟の直義がその地を治めてゐたが、たまたま北條高時の子の時行が兵を起して、鎌倉を取りもどさうとした。この戰に、直義は敗れて鎌倉を逃出したが、その時、おそれ多くも人をやつて親王を害したてまつつた。親王の御年は、時にまだ二十八であつた。鎌倉宮は、親王をおまつり申しあげたお社である。

鎌倉宮

尊氏がそむいた

尊氏は、征夷大將軍となつて東國を治めたいと、朝廷に

尊氏兄弟が九州に走つた

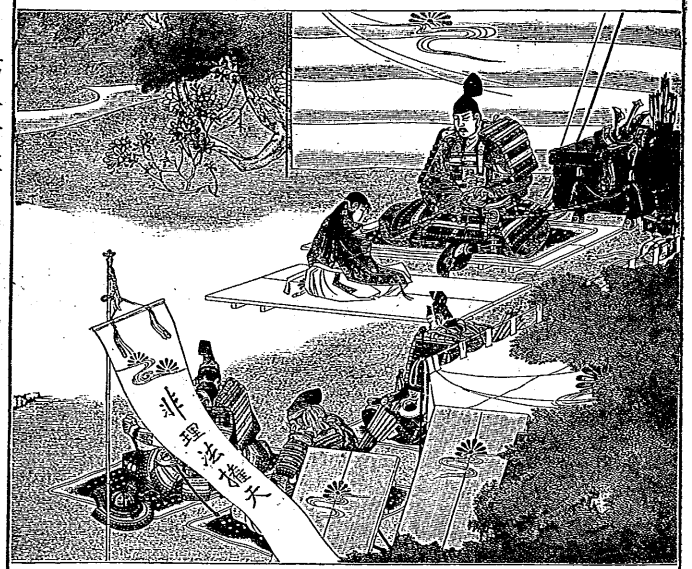
お願ひ申したが、まだその御許もないうちに、勝手に鎌倉に下つて時行をうち破り、まもなく、その地に據つて朝廷にそむいた。天皇は、義貞をやつて、これをお討たせになつた。ところが、官軍は竹下や箱根の戰に敗れて退いたので、尊氏は、直義と共に、京都へ攻上つて來た。天皇は、これを避けて、しばし比叡山にお出ましになつた。けれども、この頃、天皇の御子義良親王をいたゞいて奥州を守つてゐた北畠顯家も、また朝廷の御命令を受け、親王のお供をして、兵をひきゐて京都へ上つて來た。さうして、正成や義貞らと力を合はせて大いに賊軍を破り、尊氏や直義を西國へ走らせたので、天皇はふたたび京

尊氏兄弟が京都に攻上つて來た

正成が櫻井の驛で正行をさとした

都におかへりになつた。

尊氏は、九州にゐて勢をもりかへし、直義と共に海陸兩軍をひきゐて、京都へ攻上つて來た。そこで、義貞がこれを兵庫で防がうとしたが、賊の勢がたいへん盛なので、天皇は、正成をやつて、義貞を助けさせられることになつた。この時、正成は、しばらく賊の勢を避け、その勢が衰へるのを待つて、一度にうちほろぼさうといふ謀を建てたが、用ひられなかつた。それ故、正成は、おほせに從つて、たゞちに京都を立つた。途中、櫻井の驛に着いた時、かねて天皇からいたゞいてゐた菊水の刀を、かたみとして子の正行に與へ、「この度の合戰には、味方が勝つことはむづかしい。自分が戰死した後は、天下は足利氏のものとならう。けれども、そなたは、どんなつらい目にあつても、自分に代つて忠義の志を全うしてもらひたい。これが何よりの孝行である」と、ねんごろにさ



櫻井の驛での正成父子の別

として河内へ歸らせた。それから、進んで湊川に陣を取り、直義の陸軍と戰つたが、その間に、尊氏の海軍も上陸して、後から攻めかゝつて來た。正成は大いに奮戰した。けれども、小勢で、かやうに前後に大敵を受けてはどうすることも出來ず、部下はたいてい戰死し、正成も身に十一箇所の傷を受けた。そこで、もはやこれまでと覺悟して、湊川の近くにある民家にはいつて自害しようとした。この時、正成は弟の正季に向つて、「最期にのぞんで、何か願ふことはないか。」とたづねた。正季は、たゞちに「七度人間に生まれかはつて、あくまでも朝敵をほろぼしたい。」とそればかりが願である。」と答へた。正成は、いか

正成が湊川で戰死した

にも滿足さうににつこり笑ひ、「自分もさう思つてゐるぞ。」といつて、兄弟互に刺しあつて死んだ。時に、正成は年四十三であつた。今、正成をまつつた神戸の湊川神社のあるところは、正成が戰死した地で、「境内には、德川光圀の建てた「嗚呼忠臣楠子之墓」としるした碑がある。實に、正成は古今忠臣のかゞみである。わが國民は、皆、正成のやうな眞心を以て、大いに御國のためにつくさねばならぬ。

湊川神社

古今忠臣のかゞみ

第二十四　新田義貞

名和長年が戰死した

湊川の戰に、新田義貞も敗れて京都に退いたので、天皇

後醍醐天皇が吉野に行宮をお定めになつた

はふたたび比叡山へ行幸をなされ、尊氏は進んで京都に入つた。官軍は、これを取りかへさうとしたが、失敗して、名和長年らは戰死した。長年は、今、伯耆の名和神社にまつつてある。

尊氏は京都に入ると、賊の名を避けるために、豐仁親王を立てて天皇と申しあげてゐた。けれども、ほどなく、いつはつて朝廷に從ふやうに見せかけ、後醍醐天皇に京都へおかへりなさるやうにお願ひ申しあげた。天皇は、かりにその願をお許しになつて、京都におかへりになつたが、まもなく神器を御身にそへて、ひそかに吉野に行幸をなされ、行宮をこゝにお定めになつた。

義貞が北國に向つた

さきに、天皇は、比叡山の行宮で、義貞を召して、北國におもむいて回復をはかるやう、おほせつけになつた。義貞涙を流して感激し、すぐ一族のものといつしよに、皇太子恒良親王と皇子尊良親王とをいたゞいて、北國に向つた。途中、木目峠

新田義貞が北國に向つた

を越えたが、折あしく吹雪がはげしくて行軍の苦しみは非常なものであつた。取分け、河野の一族は、にはかに敵に出あつたので、戰はうとしたが、馬は雪にこゞえて進まず、兵士は指をおとして弓を引くことが出來ず、進退きはまつて、主從三百人餘り、一人も殘らず討死した。義貞はやう〳〵越前の敦賀に着き、金崎城にたてこもつた。ところが、こゝもほどなく賊軍に圍まれて、城が危くなつたので、子の義顯を殘して城を守らせ、自分は杣山に行つて兵を募つた。けれども、その間に、兵糧がなくなつて、城がおちいり、尊良親王は義顯らと共に御自害なさつた。皇太子は、捕らはれて京都へ送られなさつた

義貞が藤島で戰死した

が、とう〳〵尊氏のために害せられたまうた。

義貞は、かういふしあはせにあつても、少しもくじけず、杣山から奮ひたつて、たび〳〵賊軍と戰つてこれを破つた。その後、藤島の戰に、賊の勢が強くて、官軍は今にも敗れさうになつてきたので、わづかに五十騎を從へて、急いでこれをすくひに行つた。途中、三百騎の敵兵に出あひ、大いに奮戰したが、乘つてゐた馬が、矢にあたつて泥田の中に倒れたので、義貞はすぐ起きあがらうとすると、その時、運わるく、飛んで來た一筋の矢が額にあたつた。さすがの義貞も、もはやこれまでと覺悟して、みづから首をはねて、いさぎよく死んだ。時に、年三十八で

あつた。これから、北國の官軍は、中心とたのむ大將を失つて、全く衰へてしまつた。今、福井の藤島神社には、義貞がまつられてゐる。

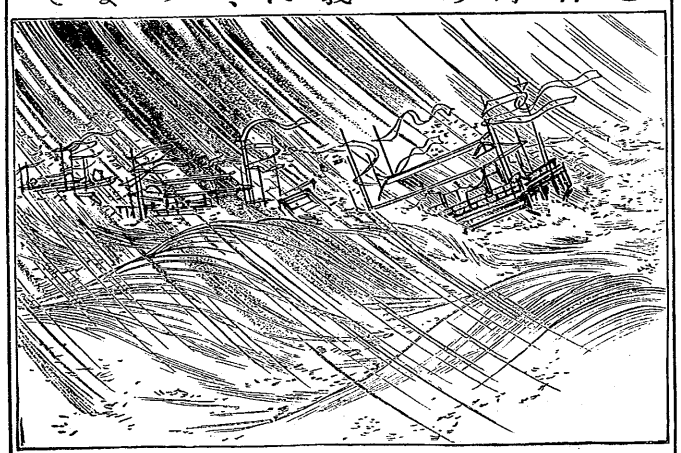
北畠顯家が戰死した

第二十五　北畠親房と楠木正行

新田義貞が戰死する少し前に、北畠顯家もまた戰死した。さきに、顯家は、尊氏を九州に走らせてから後、ふたたび義良親王をいたゞいて陸奥に下り、靈山城にたてこもつてゐたが、天皇が吉野に行幸をなさつたことを知ると、また親王をいたゞいて京都へ向ひ、所々で戰つて敵を破つた。けれども、その兵は、たびくの戰にたいへん疲れて、都に攻入ることが出來ず、顯家は和泉の石津で戰死したのである。時に、年やうやく二十一であつた。

親房らが海路で東國へ向つた

かういふやうに、顯家や義貞らの忠臣がつぎくに戰死したが、後醍醐天皇は、御志いよくく堅く、顯家の父親房らにいひつけて、また義良親王をいたゞいて



北畠親房ら海上で大風にあつた

後醍醐天皇がおかくれになつた

親房が神皇正統記をあらはした

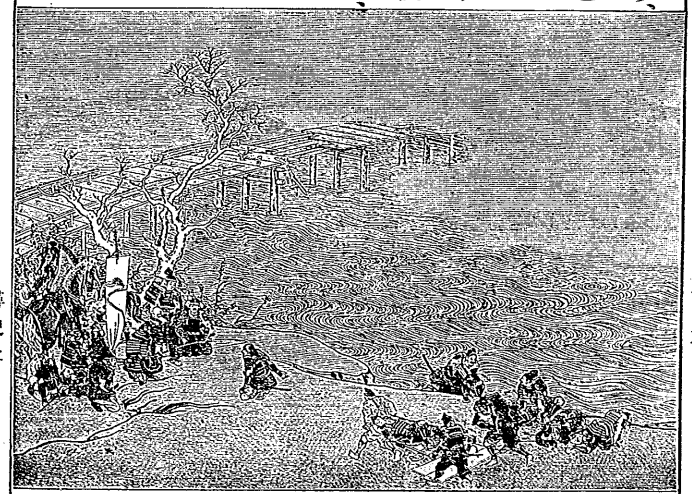
陸奥に下らせ、官軍の勢を取りもどさせようとおはかりになつた。親房らは、伊勢から海路で東へ向つたが、途中で大風にあひ、親房の船は常陸に着き、親王の御船は伊勢に吹きもどされたので、親王はそのまゝ吉野へお歸りになつた。たまく、天皇は御病におかゝりになつた。この時、まだ國々に朝敵がはびこつて、世の中がさわがしいので、これをたいそう殘念にお思ひになりながら、とうく行宮でおかくれになつた。そこで、義良親王が御位をおうけつぎになつた。第九十七代後村上天皇と申しあげる。

その頃、東國の武士はたいてい賊に味方してゐたので、親房は陸奥に進むことが出來ず、常陸の關城で賊兵に圍まれた。親房は、晝夜賊を討つ謀をめぐらしながら、そのひまく に、神皇正統記をあらはし、天照大神から後村上天皇に至るまでの御血統の由來を述べて、君臣の大義を明らかにした。そのうち、まもなく城がおちいつたので、親房はのがれて吉野に歸り、これから楠木正行らと力を合はせて、ともく に天皇をお助け申しあげた。

楠木正行が四條畷で戰死した

正行は、さきに十一歳の時、櫻井の驛で父に別れ、國に歸つてからは、よく父の遺言を守つて、つねく 朝敵をほろぼさうと心がけて、いつしやうけんめいにはげんだ。

やうやく成人してから、後村上天皇にお仕へして、たびく賊軍と戰つて、これをうち破つた。取分け、攝津の瓜生野の戰では、賊兵が大いに敗れ、先を爭つて逃げる時、あわてて川におちて流れるものが五百人餘りもあつた。正行は、これを見てたいへん氣の毒に思



楠木正行が賊兵をいたはつた

ひ、部下のものにいひつけて、これをすくはせ、一々親切にいたはつて送りかへした。かういふ有樣で、官軍の勢はますく強くなつて、今にも京都へ迫らうとした。尊氏は大いに恐れ、高師直にいひつけて、急ぎ大兵をひきゐて正行に當らせた。そこで、正行は、たゞちに一族百四十人ばかりをつれて、吉野にまゐつて天皇に拜謁し、また後醍醐天皇の御陵に參拜して御暇乞を申し、如意輪堂の壁板に一族の名を書きつらねて、その末に、

かへらじとかねて思へば梓弓、
なき數にいる名をぞとゞむる。

といふ歌をしるし、死を決して河内に歸り、賊軍と大い

に四條畷で戰つた。この時、正行はどうかして師直を討取らうと考へ、たびたびその陣に迫つたが、身に多くの矢きずを受け、力もつきはてたので、とうゝ弟の正時と刺しちがへて死んだ。時に、正行は年やうやく二十三であつた。前年、正行にすくはれた賊兵は、

楠木正行が歌を如意輪堂に書きとめた

正行の忠孝兩全

深くその恩に感じ、正行に從つてこの戰でことゝくく討死した。實に正行のやうな人こそ、勇も仁もある、りつぱな武士で、忠孝の道を全うした人といはねばならぬ。かうして、楠木氏は、正行の死んだ後も、その一族は、皆、眞心こめて長い間朝廷の御ためにはたらいた。今は、四條畷神社に正行をまつつてある。

親房がなくなつた

この後は、親房がひとり官軍の中心となつて、大いに忠義をつくしたが、まもなく病にかゝつてなくなつたので、これから官軍の勢は、いよゝ衰へるやうになつた。攝津の阿部野神社や岩代の靈山神社に、親房父子をまつつてある。

村上天皇―具平親王……親房―顯家・顯信・顯能

肥後の菊池氏

第二十六　菊池武光

朝廷では、たのみにしてゐた正行や親房のやうな忠臣がつぎ〱になくなつたばかりでなく、國々の官軍もまたたいてい衰へたが、ひとり九州では、官軍の勢がなほ盛であつた。さきに弘安の役に武勇の譽をあげた菊池武房の孫の武時は、元弘三年、國々に勤王の軍が起つた時、早くも義兵を肥後に起し、わづかな兵をひきゐて博多の賊を討ち、はなぐ〱しい戰死をとげた。これが九

州で起つた勤王の軍のさきがけて、その後、武時の子らも、皆よく父の志をうけついで忠義をつくした。

武光が懷良親王をお迎へ申した

時に、後村上天皇の御弟懷良親王は、西國の官軍を統べられるために、九州へお下りになつた。武時の子の武光は、これを肥後にお迎へ申し、親王をいたゞいて、たびたび賊軍と戰ひ、その勢がおひ〱盛になつた。尊氏はそのなりゆきを心配して、みづから武光を討たうとしたが、まだ出かけない中に、病にかゝつてにはかに死んだ。

筑後川の戰

菊池氏の勢はいよ〱強くなり、武光は親王をいたゞいて兵を筑後に進め、賊の大將少貳頼尙の軍と筑後川をはさんで陣を取つた。武光は川を渡つて戰をしかけ

たが、賴尙は陣を堅うして、なか〳〵戰はうとしなかつた。そこで、武光は、さつそく兵を分けて攻めることとし、自分は親王といつしよに、敵の中堅を目ざしてつき進んだ。この戰はたいへんはげしく、親王は御身に三箇所までも傷をおはれたほどであつた。武光は、馬がきずついた上

筑後川の戰

に、冑がさけたので、敵を斬つてその馬と冑を奪ひ、死を決してめざましく戰つた。そのため、さすがの敵もさゝへきれずに敗れ退き、賴尙は本國筑前に逃げかへつた。世にこれを筑後川の戰といふのである。

武光は、なほも親王をいたゞいて筑前に進み、賴尙を走らせて太宰府に入り、さらに京都へ向はうとしてゐたが、その後まもなく、なくなつた。せつかく勢づいてきた九州の官軍は、これからだん〳〵衰へていつた。けれども、武光の子孫は、なほ長い間朝廷の御ために力をつくした。肥後の菊池神社は、この菊池氏一族の忠臣をまつつたお社である。

子孫つぎつぎに朝廷の御ためにつくした

藤原忠平……武房―時隆―武時―武重
　　―武敏
　　―武光

尊氏の無道

第二十七　足利氏の僭上

尊氏は、さきに後醍醐天皇からおてあつい恩賞をいただきながら、その御恩を忘れて、朝廷にそむき、忠義な人人を殺し、おそれ多くも皇族を害し申すやうなことさへした。かやうな無道の行が多かつた上に、自分の家をもよく治めることが出來ず、兄弟互ににくみあひ、はては弟の直義を毒殺してしまつた。部下の將士もたびたびそむき、また互に爭つてゐたので、いつもさわぎが絶

細川頼之が義滿をたすけた

後龜山天皇が京都におかへりになつた

えなかつた。その間に、足利氏は、尊氏の子義詮から孫の義滿の代となつた。

義滿が年やうやく十歳の時、父義詮は重い病にかゝつて、もはや回復の望がなくなつたので、日頃信頼してゐる細川頼之に遺言して、義滿をたすけ導かせることにした。頼之は、足利氏の一族であるが、いたつてつゝしみ深い人であつたから、義滿のそばに仕へてゐる人々には、常におごりを戒め、またわがまゝな大名をおさへるなど、眞心こめてその主をたすけた。それ故、これから、足利氏の基はだん〳〵固くなつた。

義滿は、やがて使を吉野にさしあげて、天皇に、京都へお

義満がおごりをきはめた

かへりなさるやうにお願ひした。後村上天皇の御子（第九）十九代後龜山天皇は、かねゞ、長い間の戰亂で、萬民が苦しんでゐることをふびんに思つていらつしやつたので、たゞちにその願をお許しなさつて、京都におかへりになり、神器を（第百）代後小松天皇にお傳へになつた。時に紀元二千五十二年（元中九年）、後醍醐天皇が吉野へ行幸をなさつてから、およそ六十年ばかりたつてゐた。今までたいへん亂れてゐた世の中も、これから、やつとしづまつた。けれども、義滿は征夷大將軍となつて、大いに勢を振るふやうになり、ふたたび武家政治の世となつた。

義滿は、まもなく將軍職を子の義持に讓つたが、自分は

金閣

太政大臣になりたいと望んだ。武人で太政大臣に任ぜられたことは、平清盛から後全く例がなかつたのである。それにもかゝはらず、義滿はたびゝ朝廷にお願ひして、とうゝ望をとげた。このやうに、義滿のわがまゝはしだいにつのり、はてはおごりの生活にふけるやうになつた。その室町の邸は、この上ないりつぱなもので、庭には美しい花がたくさん植ゑてあつたから、人々はこれを花の御所といつた。義滿はまた、京都の北山に別莊を造り、庭に三層の樓閣を建てて、壁といはず、戸といはず、すべて金箔で張りつめた。その美しさは、言葉にも、筆にもつくせないほどで、人々は、これを金閣と呼んだ。

義滿の僭上

金閣

義滿は髪をそつてこゝに住み、なほ政治をとつてゐたので、朝廷の官吏も、皆義滿の威勢に恐れて、この別莊に來てその命令を受けるといふ有樣であつた。

義滿は、勢の盛なのにまかせて、臣下の分をわきまへぬわがまゝな行が、いよ〳〵多くなつた。か

義滿が國體をかろんじたる

つて比叡山に登つた時などは、關白以下の公卿を從へて、おそれ多くも上皇の御幸の御儀式にまねたほどであつた。この頃、支那は、元がほろびて明の時代となつてゐた。義滿は使を明にやつて交際をはじめたが、明主が義滿を指して日本國王といつても、義滿は別にはゞかる樣子もなく、自分からも進んで日本國王と名のつて、書を送つた。わが國には、天皇の外にまた國王があらうか。義滿の行は、實にわが國體をかろんじたものといふべきである。

第二十八　足利氏の衰微

義政が政治に怠つた

義滿から四代たつて、義政の代となつた。義政はわづかに九歳で家をつぎ、ほどなく將軍となつたが、少しも政治に心をいれなかつた。たま〳〵大風や洪水があつて、五穀がみのらない上に、惡病がはやつて、人民が非常にこまつてゐるのに、義政はいつかうあはれみの心がなかつた。かへつて大金をかけて盛に室町の邸の普請などをしたので、第百二代後花園天皇は、たいそう御心配になつて、これを戒められた。さすがの義政もこれにおそれいつて、いつたん工事をやめさせたが、なほたび〳〵花見の宴などを開いて、おごりにふけつてゐた。それ故、費用が足らず、人民からたくさんの税を取立てたので、人

足利家の相續爭

人の苦しみはます〳〵つのり、世の中はいよ〳〵さわがしくなつた。

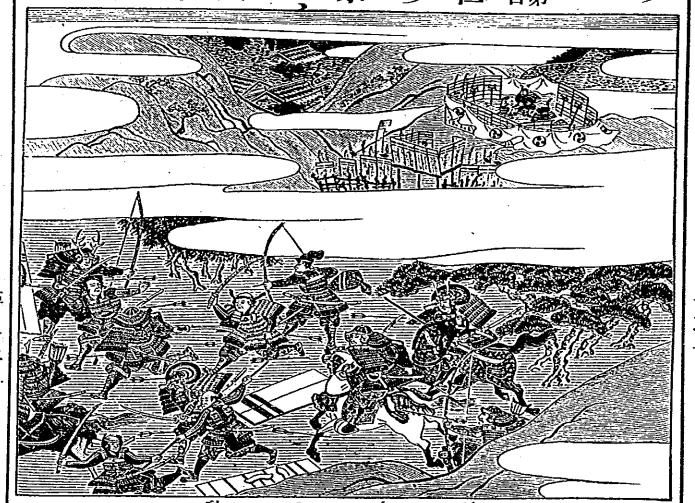
細川勝元と山名宗全とが對立した

義政は、三十歳ぐらゐになると、はや政治にあいてきた。けれども、まだ子がなかつたので、弟の義視を養子とした。さうして、義視に將軍職を讓らうと考へ、細川勝元にこれを助けさせた。この時、義政は、この後たとひ子が生まれても、決して義視を退けるやうなことはしないと、堅く約束した。ところが、まもなく實子の義尚が生まれると、その母は、どうかして義尚を立てようと考へ、山名宗全が勝元におとらない勢があるのを見て、これに義尚をたのんだ。足利家の相續の爭は、そこで、細川氏と山

名氏との爭となつたのである。

應仁の亂

紀元二千百二十七年、第百三代後土御門天皇の應仁元年に、勝元も、宗全も、めいめい味方の大軍を京都に呼集めた。さうして、勝元は、室町の幕府に入つてこゝに陣を取り、その兵はおよそ十六萬、宗全の陣はその西にあつ



應仁の亂

大亂の後の京都の有樣

て、その兵はおよそ十一萬であつた。これから、兩軍は十一年の長い間戰つたが、その間に、宗全や勝元はつゞいて病死し、後には、兩軍の將士らも戰爭にあいて、しだいに國々に引きあげていつた。京都のさわぎは、そこではじめてしづまつた。世にこれを應仁の亂といふのである。この亂のために、幕府をはじめ、名高い社や寺、その他たくさんの建物は、たいてい燒けてしまつて、花の都もあはれ燒野の原となつた。ある人が、この變りはてた有樣をなげいて、

汝や知る都は野べの夕雲雀、
あがるを見ても落つる涙は。

とよんだ。

幕府が衰へた

かういふ大亂の中でも、義政はなほおごりをやめないで、後に、京都の東山に別莊を造り、義滿の金閣にならつて、庭の中に銀閣を建て、茶の湯などの遊にふけり、むだに月日を送つてゐた。それで、幕府の財政はます〳〵苦しくなり、將軍の命令は、ほとんど行はれないやうになつた。

銀閣

足利義滿
- 二 義持
  - 三 義量
- 四 義敎
  - 五 義勝
  - 六 義政
    - 七 義尙
  - 義視

第二十九　北條氏康

戰國時代

應仁の亂がやんだ後、多くの大將は、めい〳〵自分の國に引きあげて、なほ互に爭つてゐたが、將軍の威勢が衰へてゐるので、これをおさへることが出來なかつた。この間に、英雄が四方にきそひ起り、およそ百年の間、國々に戰亂は、ほとんど絶えまがなかつた。世にこの時代を戰國時代といふのである。

北條早雲が起つた

かういふ時勢に、まづ起つたのは、北條早雲である。早雲は、平氏で、はじめ伊勢にゐたので伊勢新九郎といつた。生まれつきすばしこい人であるから、早くから時勢を見ぬいて、家をおこさうと考へ、六人の勇士をひきつれ

て駿河に下つて來たが、その頃東國がたいへん亂れてゐたのにつけいつて、急に奮ひおこり、伊豆を取つて北條にゐた。さうして、惜しげなく金銀をまいて人望をあつめ、また北條氏の子孫ととなへて、ますく士民をなつけた。早雲は、つゞいて相模を取らうと考へ、使を小田原城にやつて、鹿狩といつはつて箱根山を借りうけ、大勢の兵士を獵師の姿にかへて山に入りこませ、不意に小田原城に攻寄せた。城主は大いに驚き、あわてて逃去つたので、早雲は、やすく と城を奪つてこゝに移つた。それからおひく に相模を從へて、勢を東國に振るふやうになつた。

氏康の修養

早雲の子の氏綱は、父に似て勇武な人で、兵を武藏に進め、上杉氏を破つて、江戸や川越などの城をおとしいれた。氏綱の子の氏康は、十二歳の頃まではたいへん臆病であつた。後、これを深く恥ぢ、大いにいくさの事を習つて、とうく 勇氣のあるりつぱな人となり、父の後をついで、ますく 勢を盛にした。

川越の戰

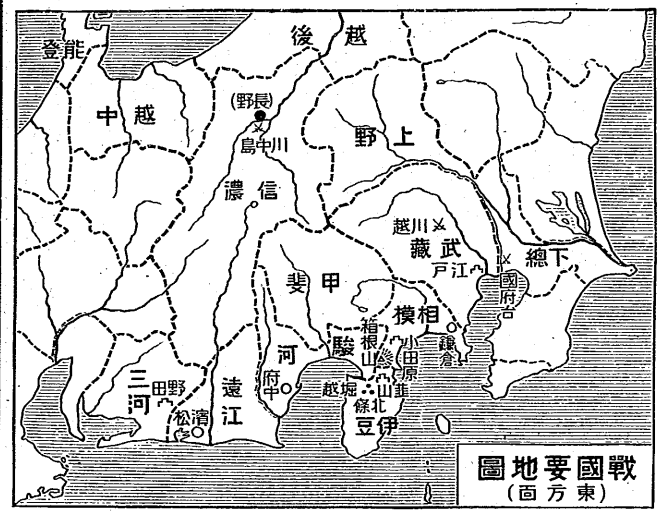
この頃、上杉朝定や憲政らが、川越城を取りかへさうとして、八萬の大軍をひきゐて攻寄せた。北

北條氏康

氏康はよく國を治めた

條氏の將は、堅く城を守つて、半年ももちこたへたが、そのうち、城中の兵糧がだん〳〵乏しくなつた。そこで、氏康は、みづから小田原から助けに行つたが、その兵はわづかに八千ぐらゐの小勢であつたので、敵の大軍にはとうていてむかふことが出來なかつた。そこで、わざと仲直りを申しこんで、敵にゆだんをさせ、夜中に急に攻寄せて、大いにこれをうち破つた。この時、朝定は戰死した。憲政は、いつたん上野に逃げかへつたが、ほどなくまた氏康に攻められて、越後へ走つた。

これから後、氏康はます〳〵他の國々を攻めて、大いに領地をひろめた。氏康は、戰が上手なばかりでなく、國を



治めることもすぐれてゐて、つね〳〵部下をかはいがり、よく領内の人人をめぐんだ。それ故、人人は、皆氏康になつき、他の國々からもその政治をしたつて、われ先にと小田原に集つて來るものが多かつたといふことである。早雲が起つてからおよそ六十年ばか

りで、その領地は、伊豆をはじめ、相模・武藏・上野などの國國にまでひろまつた。

第三十　上杉謙信と武田信玄

謙信のおひたち

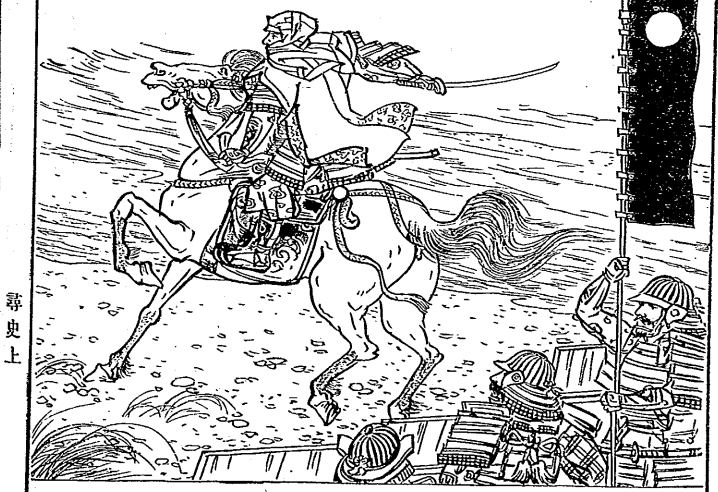
北條氏と肩を並べて勢を爭つてゐたのは、越後の上杉謙信である。謙信は、もと長尾氏で、平氏の出であるが、その家は、代々上杉氏に仕へて越後にゐた。父を長尾爲景といひ、謙信はその二男である。生まれつき大膽で、たいそう勇氣があつた。幼い時に、父が戰死して、兄の晴景が家をついだが、柔弱であるため、とかく部下にかろんぜられて、國中がたいへん亂れた。そこで、謙信は、僧となつて他の國々を見てあるき、やがて越後に歸つて兄に代り、國内の亂を平げて、進んで近國をも從へ、その勢はなかなか盛になつた。後、上杉憲政が北條氏康に追はれて謙信をたよつて來た時、その家名をくれたので、長尾氏を改めて上杉氏を名のることになつたのである。これから、謙信は、憲政のために、たびたび兵を關東に出して北條氏と戰つた。ある時など、はるばる小田原の城下近くまで攻寄せたことがあつたが、敵は謙信の武勇に恐れいつて、途中一人として防ぐものもなく、まるで無人の原を行くやうな有樣であつた。

小田原に迫つた

この頃、甲斐に武田信玄がゐた。その家は、新羅三郎義光

信玄のおひたち

から出て、代々甲斐の領主であつた。信玄は、幼い時から謀にすぐれてゐた。十六歳の時、父の信虎に從つて信濃に攻入つた。信虎は八千の兵をひきゐて攻めたが、敵は堅く城を守つてなかなかくつたくしなかつた。ところが、信玄は、わ



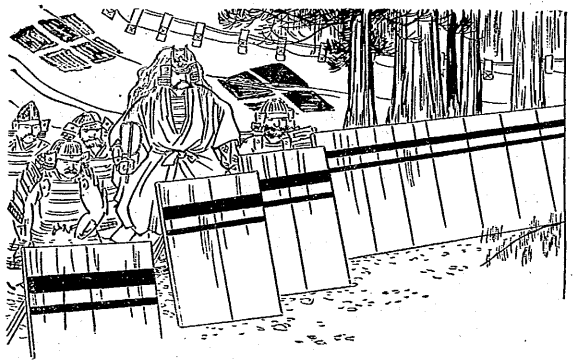
川中島で對陣してゐる上杉謙信

信濃を取つた

川中島の戰

づかに三百の小勢で謀をめぐらし、不意打をして城をおとしいれた。ほどなく父に代つて、よくその國を治め、またしだいに信濃を攻取つたから、信濃の村上氏らは、越後に逃げて、謙信に助をたのんだ。

謙信は、村上氏らのために、たびたび信濃に攻入つて、信玄と川中島で戰つた。中でも、ある年の秋の戰に、謙信が、一萬三千の兵を從へて川中島に陣を取つて



川中島で對陣してゐる武田信玄

謙信が敵に塩を送つた

信玄は望をとげないで死んだ

ゐると、信玄は、二萬の大軍をひきゐてこれをはさみうちにしようとした。謙信は、たゞちにその謀をさとつて、不意に信玄の陣に攻入り、みづから大刀を振るつて信玄めがけて切りつけた。信玄は、軍配團扇でこれを防いで、やつと危いところをのがれることが出來た。かやうにして、長い間その勝敗はきまらなかつた。謙信は、信玄とこれほどはげしく戰つてゐても、甲斐の人民が塩が不足して苦しんでゐることを聞くと、たいへん氣の毒に思ひ、越後からわざ〳〵塩を送らせた。人々はその義理のあついのに、深く感心した。

信玄と謙信は、めい〳〵、折さへあれば京都に上つて、天下に號令しようと望んでゐた。そのため、信玄は、盛に近國を攻取り、はては駿河を合はせ、遠江に進み、さらに三河に入つたが、たま〳〵病にかゝつて、國に歸る途中で死んだ。謙信は、これを聞いて、よい相手を失つたといつて、たいそう惜しんだといふことである。

謙信も目的をはたさないで死んだ

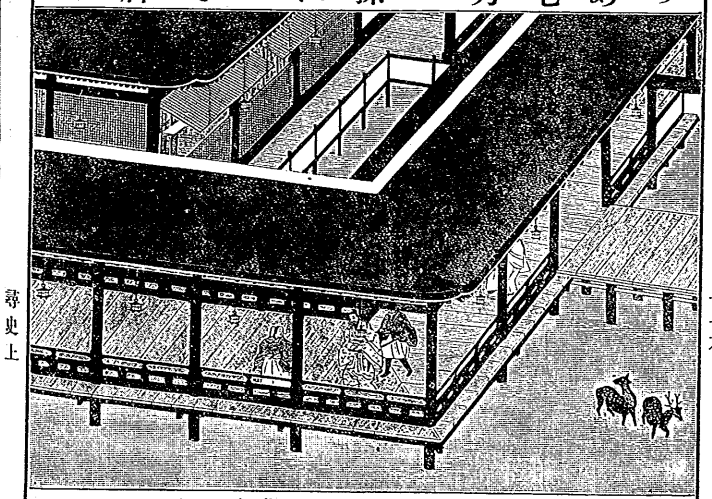
謙信もまた、越中や能登などの國々を取り、大兵をひきゐていよ〳〵京都へ向はうとした。ところが、出發まぎはになつて、急病で死んだので、とう〳〵その目的をはたすことが出來なかつた。

第三十一　毛利元就

東國で、北條・上杉・武田の三氏が互に勢をはりあつてゐた時、西國では、毛利元就がだんゝ勢力を増してゐた。

元就のおひたち

元就は大江匡房の子孫で、その家は代々安藝にあつた。元就は、幼い頃から大きな志をいだいてゐた。十二歳の時、嚴島神社に參詣したが、從者が



毛利元就が嚴島神社に參詣したた

何ごとか一心に祈つたのを見て、「何を祈つてゐたのか。」とたづねた。從者は、「若君に、中國を平げさせていたゞきますやうにと、祈りました。」と答へた。すると、元就は、「お前はなぜ天下を平げさせていたゞくやうにと、祈らなかつたか。天下を平げようと志しても、やつと中國ぐらゐしか取れない。中國を平げようと志したのでは、どうして中國を取ることが出來るか。」といつて、大いに戒めたといふことである。元就は、成人するにつれて、智力も勇氣もともにすぐれ、またたいそう部下をかはいがつたので、人々は、皆、心からなついた。

大内氏のみだれ

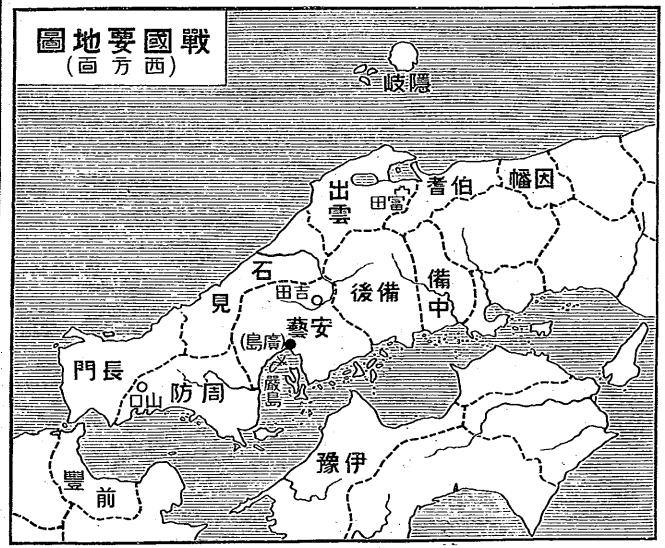
これより前に、長い間中國で勢を振るつてゐたのは、周

防の大内氏であつた。大内義興は、數箇國を領して、たいへん富强であつて、その城下の山口は、京都をしのぐほどにぎはつた。これに引きかへ、その頃の京都は、大いに衰へてゐて、朝廷でも御費用が足らないので、第百五代後奈良天皇は、久しく御卽位の禮をお擧げになることも出來ないやうな、おそれ多い御有樣であつた。この時、義興の子の義隆は、その御費用をさし上げて、忠義をつくした。けれども、義隆は富强をたのんで、しだいにおごりにふけり、軍備を怠つたので、しまひには、その家臣である陶晴賢に害された。

嚴島の戰

この頃、元就は義隆の部下であつた。そこで、すぐ義兵を

元就の勢がよくなつた



起して、晴賢の大軍を嚴島におびき出し、風雨の夜にまぎれて島におし渡り、不意にその陣に攻入つて、とうとう晴賢をほろぼしてしまつた。世にこれを嚴島の戰といつてゐる。

元就は、その勢でたちまち周防や長門など

御即位の費用をさし上げた

三人の子を戒めた

の國々を取つて大内氏に代つたが、また兵を出雲に出して尼子氏と爭ひ、七年の間も富田の城を圍んで、とうとうこれを從へた。そこで、毛利氏は、中國や九州で十箇國餘りを領することになり、大内氏よりもはるかに強くなつた。けれども、元就は少しもおごる心がなく、よく大義をわきまへて、第百六代正親町天皇が御即位の禮を行はせられる時には、その御費用をさし上げて、忠勤をはげんだ。またある時、その子毛利隆元・吉川元春・小早川隆景の三人に、互に仲よく助けあつて毛利家を守つてゆくやうにと、ねんごろにいひ聞かせた。隆元は父にさきだつて死んだので、その子の輝元が家をついだ。元春・隆景の二人は、心を一にしてこれを助けたので、毛利氏は、元就の死んだ後でも、その勢は少しも衰へなかつた。

平城天皇…大江匡房…廣元―毛利季光…弘元―元就―隆元―輝元
　　―元春（吉川）
　　―隆景（小早川）

公卿の苦しみ

第三十二　後奈良天皇

戰國時代には、北條・武田・上杉・毛利の四氏の外にも、豪族が所々にたてこもつて、互に土地を奪ひあひ、いつも戰爭が絶えなかつた。それ故、國々にある公卿の領地はいふまでもなく、皇室の御料地でさへ、いつのまにか、勢力のある豪族にをかされるといふ有様であつた。ところ

が、幕府も貧しくて、皇室の御費用をさし上げることが出來なかつたので、公卿のうちでも、緣をたよつて地方に下るものが多く、京都に殘つたものは、衣食にも事かくほどであつた。ある時、身分のある公卿に面會を申しこんだ人があつた。その人は、「この寒い時候に、夏の着物では面目ないから」と、ことわられたので「いや、それで結構です」といつて、會つてみると、公卿は、素肌に蚊帳をまとつてゐたさうである。當時の公卿が、どんなにあはれなくらしをしてゐたかは、この話からでも、おほかた知ることが出來よう。

朝廷が衰へられた

後奈良天皇の御代には、朝廷は取分け衰へてゐられたので、御所の築地が破れても、これをつくろふことが出來ず、賢所の御あかしの光は、遠く三條の橋から見えたといはれてゐる。かういふ御有樣であるから、おそれ多くも、天皇の毎日の御用さへ御不自由なことが、たびたびであつたといふ。

天皇は御儀式を御再興なさつた

けれども、天皇は、このやうに乏しい御費用の中からもなほ御儉約なさつて、長い間すたれてゐた朝廷の御儀式を御再興になつた。それのみか、伊勢神宮の御建物がたいそうあれてゐたので、これをお造りしようとお考へになつた。けれども、御心のやうにならなかつたので、いたしかたなく伊勢には奉幣使をさし向けて、そのわ

天皇は神宮をおうやまひになつた

けをことわらせられた。殊に、天皇は、御あはれみの御心の深い御方であつた。それ故、たまゝ少しの貢でもさし上げるものがあると、これをすぐ皇族や公卿にお分ちになつた。また、日頃大御心を萬民の上におそゝぎなさることも、ひととほりでなかつた。

天皇の御仁德

後奈良天皇の御筆

般若心經

ある年、長雨が降りつゞいた上に、惡病がはやり、そのために大勢の人が死んだ。天皇は、これを深く御心配になつて、御みづから經文を寫して國々にお下しになり、そのわざはひがとれるやうに祈らしめられた。天皇が、御身のお苦しみを少しも御心にかけられず、たゞ一心に萬民をおめぐみ

くださつた御仁德のかたじけなさには、一人でも感泣しないものがあらうか。

尋常小學國史　上卷　終

年表

御代數	天皇	紀元	年號	摘要
一	神武天皇	元	元年	天皇が御卽位の禮をお擧げになつた
三	景行天皇	七五七	二十七年	日本武尊が熊襲をお討ちになつた
同		七七〇	四十年	日本武尊が蝦夷をお討ちになつた
一四	仲哀天皇	八六〇	九年	神功皇后が新羅をお討ちになつた
一六	仁德天皇	九七六	四年	天皇が稅をおゆるしになつた
二九	欽明天皇	一二二三	十三年	百濟からはじめて佛敎が傳はつた
三三	推古天皇	一二六四	十二年	聖德太子が十七條の憲法をお定めになつた
同		一二六七	十五年	聖德太子が使を支那におやりになつた
三六	孝德天皇	一三〇五	大化元年	大化の新政がはじまつた
三八	天智天皇	一三二九	八年	藤原鎌足がなくなつた
四三	元明天皇	一三七〇	和銅三年	天皇が奈良の都をおたてになつた
四五	聖武天皇	一四〇一	天平十三年	天皇が國ごとに國分寺をお造らせになつた
四八	稱德天皇	一四二九	神護景雲三年	和氣淸麻呂が宇佐八幡の敎を申しあげた
五〇	桓武天皇	一四四四	延曆十三年	天皇が平安京をおたてになつた

五〇	桓武天皇	一四五七	延暦十六年
	同	一四六四	同 二十三年
五一	平城天皇	一四六六	大同 元年
六〇	醍醐天皇	一五六一	延喜 元年
六八	後一條天皇	一六八七	萬壽 四年
七〇	後冷泉天皇	一七三	康平 五年
七一	後三條天皇	一七八	治暦 四年
七三	堀河天皇	一七四七	寛治 元年
七七	後白河天皇	一八一六	保元 元年
七八	二條天皇	一八一九	平治 元年
八〇	高倉天皇	一八三九	治承 三年
八一	安德天皇	一八四五	壽永 四年
八二	後鳥羽天皇	一八五二	建久 三年
八四	順德天皇	一八七九	承久 元年
八五	仲恭天皇	一八八一	同 三年
九一	後宇多天皇	一九三四	文永十一年
	同	一九四一	弘安 四年
九六	後醍醐天皇	一九九三	元弘 三年

天皇が坂上田村麻呂に東北地方をお討たせになつた
最澄と空海とが唐に渡つた。最澄は翌年歸つた
空海が唐から歸つた
菅原道眞が太宰府にうつされた
藤原道長がなくなつた
源頼義が安倍貞任らをほろぼした(前九年の役)
天皇が御位にお卽きになつた
源義家が清原武衡らをほろぼした(後三年の役)
源爲朝らの軍がまけた(保元の亂)
源義朝らがまけた(平治の亂)
平重盛がなくなつた
平氏がほろびた
源頼朝が征夷大將軍に任ぜられた
源實朝が殺されて源氏がほろびた
後鳥羽上皇が北條義時をお討ちになつた(承久の變)
元軍が攻めて來た(文永の役)
ふたたび元軍が攻めて來た(弘安の役)
新田義貞が鎌倉をおとしいれて北條氏をほろぼした

九六	後醍醐天皇	一九九三	元弘三年	天皇が政權をお取りもどしなさつた
同	同	一九九五	建武二年	護良親王が害されなさつた
同	同	同	同	足利尊氏がそむいた
同	同	一九九六	延元元年	楠木正成が戰死した(湊川の戰)
同	同	同	同	名和長年が戰死した
同	同	同	同	天皇が吉野に行幸をなさつた
同	同	一九九八	同 三年	北畠顯家が戰死した(石津の戰)
同	同	同	同	新田義貞が戰死した(藤島の戰)
九七	後村上天皇	二〇〇八	正平三年	楠木正行が戰死した(四條畷の戰)
同	同	二〇一四	同 九年	北畠親房がなくなつた
同	同	二〇一九	同 十四年	菊池武光が少貳頼尚を破つた(筑後川の戰)
九九	後龜山天皇	二〇五二	元中九年	天皇が京都におかへりになつた
一〇〇	後小松天皇	二〇五七	應永四年	足利義滿が金閣を造つた
一〇三	後土御門天皇	二二七	應仁元年	應仁の亂がはじまつた
同	同	二二四三	文明十五年	足利義政が銀閣を造つた
一〇五	後奈良天皇	二二〇六	天文十五年	北條氏康が上杉氏を破つた(川越の戰)
同	同	二二一五	弘治元年	毛利元就が陶晴賢をほろぼした(嚴島の戰)
一〇六	正親町天皇	二二二一	永祿四年	上杉謙信と武田信玄とが戰つた(川中島の戰)

9X130.2-3-1

昭和九年二月廿三日印刷
昭和九年二月廿七日發行

（非賣品）

著作權所有

著作兼發行者　文部省

東京市小石川區久堅町一〇八番地
印刷者　大橋光吉

東京市小石川區久堅町一〇八番地
印刷所　共同印刷株式會社